松浦佐用媛石魂録 三

へ遠13
708
3上

門 遠 14
號 708
卷 3

松浦佐用嬢石魂録後集下帙

曲亭主人著

溪齋英泉畫

千翁軒梓

明治三六年十月九日 購求

大葉子者史佚姓氏調吉士伊企儺妻也欽明
二十三年將紀男麻呂河邊瓊缶征新羅不利
戰已敗而士卒亂走伊企儺殿之斬寇無數終
勢窮就禽然不屈焉大罵寇見殺時大葉子從
在陣中與所親俱亦爲寇所掠端然立望東方
嗑詠國歌且脫領巾麾之憤然自盡矣前集既
引書紀有疑似辨言重著像贊使婦幼知其義
烈益是篇所說以伊企儺夫妻事又有之也
文政丁亥冬十一月之吉　蓑笠老逸又識

拷衾
志ら歳に
むの鶴
玄禮
妙理
しく
名子
大葉
子まる
日本
豊末志比

那儞波（なゐはの）
大葉子（おほはこ）

浦子為
むらひ
以日とせまくられ法のよるるを
誰の定えぬる

博多（はかたの）
千鳥（ちとり）

車前子

松浦佐用媛石魂録前後二集姓氏目次

將相 北條時頼 北條時宗 北條實政 **士庶** 瀬川健三道孝 長崎頼綱
博多弥四郎素延 博多倍太郎正延 鼠川加二郎武行 長城野兵太敦宗
村山俊平 関蓑七 荒石勘八 牛渕九郎清縄 濱添甲 姓名伏
室津船長乙 姓名伏 瀬川采女吉次 瀬川浦二郎選如 已上前集
根塚語默齋 姥口歌二郎得時 海原澳進 無名少年 并附 屋主店九郎
奴隷貫九郎 相肩棒太 三里非三 下祢宜海邊 已上後集出
女流 南殿 木綿妙 玉嶋 博多弥四郎妻 姓氏伏 秋布 已上前集
手枕 絲萩 輪栗 千鳥 已上後集出
近臣 筑紫経高 **近徒** 邉蝮ノ平二將純入道 岩幕入道 浮簀伊加太
檜垣轉馬 経高已下後集出 通計三十九名 姓氏目次終

松浦佐用媛石魂録後集巻之五

東都 曲亭主人編次

第十九回 伊萬里の宿に親族再聚る

哲婦の城を覆せや一念の致せ所秋布微弱の女流といへども資るに亦俊平あり主従數ゆつ大刀透間もなく踏入々々戦ふものからこの時既に暮初く。まぐ燈火を点さるゝ家の内鳥暗しく進退ゆるに便を得ぎ加るにあるゝの翁ハ隻足人なるにかゝぎしく近来殊に病身なるも原是武藝の達人なれバ二人を敵なに物ともせず障子のあとりに倚かけありける箴刺の篋を掻取て受流々々且く挑ミ戦ふ程に背門のかたよりかゝる来ぬるを枕ひとの大刀音に強偷入りぬと思ひしが羨塵に拭ふる薙刀を取卸し鞋を外して出居の紙門を颯と開れてたや俊平を薙んとし刀の光をに俊平ハ主を援る暇なけれバあるゝの翁をうち捨て。

又手枕と戦ひけり主従夫婦生死を争ふ主客の勢ひ芬らぎ優さぎ。声をかけ氣を篭て撃て晃て四口の刃を夜間の山風に電光の軒端を走るに異ならぎ。そが中にあるじの翁は頻りに早は秋布を拄て騒ぐ氣色もなく。しひの隨に疲しく咄と嘯て秋布が刃を礮とうち落し怯むをうたりと突倒し。膝に楚と組布て。やよ糸萩は何処にをる狼藉者を組留ろとて燈燭をもて来ぎやと呼る声に俊平は吐嗟と騒ぐ心は轉倒撃て大刀取次に腕斎をし透間にあらせ入は手枕振閃めらして晋む薙刀に俊平は左の膳刀尖深くかけられて。一ト声苦と叫びもあぎ。醫居に撞と俯してこげ。浩処に糸萩は稍埋火を掻起し。焠児索てうつしは手燭を乗てぞ走り来る灯光にはじめて面をあはせる主客の仰天大々ならぎ。はしも秋布主従が仇人鼠川加二郎ぞと。しひしはその人ならぎ齢五十にあまりてる半白の翁なり似

たる所はこれも亦右の眼の瞽なるのミその面影と年歳は似るべうもあらぎりけり又このあるじが組布なるは齢廿に足らぎとおぼしれいと唯妍なる女子にて又手枕に斫仆されしも素より認らぬ男子なるが素は荒拷の四天とういふ戎衣を被て。あるじ白拷の顱纏をしたり女子は亦白無垢の夾衣に白練の襌を被なるその打扮の尋常ならぬも迭にあらぬ折から外面に夜修行せる旅虚無僧の二人まぐ来て梵論々々と吹せさむ尺八戎耳にもかけぬあるじの翁は怒せる声をぬり立て。噫訝しれ婦女子の挙動にれを仇人と呼かけて撃んとしつるは所以のやある時宜によつて命を資んその来歴はいふにぞやと急しく問れて秋布はいと面なげなる声隠らして俺们は親良人の讐敵を寃ふものなるがその名を告て素は来つ人面ならぬ夕間暮にてよくその人を認めざるし。疎忽をいひ釋べくもあらねど然りとても亦所以なるにあらぎ。

秋布俊平
謬て語
默齋夫
妻と戰ふ

秋ーく

縁故を具さ告んとのまゝ領を俯く膝解退けくるゝ
起せば秋布うち落されるる短刀を拾とりく韓さ飲め衣領を合ゝ連而
るる目を拭ひ鄭ゆも名生ゐ仇くゝ定うめ彼れざるけんうるを鎌倉なる
執権家の御内人瀬川采女吉次が妻名を秋布と呼るもの良人吉次ハ。
執権の舊臣鼠川加二郎とゝのゝ殺されるゝ父博ヲ弥四郎も亦加二郎ゞ
奸計よりく無實の罪ゝ命を隕せりるゝ質強の勇ゝあるねゝその任ゝ堪ぜ
とゝども武士の女児武士の妻ゝいくゞ仇人を殺んとそ。れるゝ義僕村澤俊
平只一人相具ゝく三稔以来旅宿しるゝ仇人の所在を捜索れども猶ご便をえざり
ゝふ前月浪速ゆくるゝ親の舊僕るる関ゝ衰七とゝのゝ圖らゞ環會ひ
ーよるゝ仇人の所在を定ゝ知りぬその肥前國彼杵郡伊万里の荘ゝ郷
士ありゝその姓名ハ鼠川加二郎一眼瞽く隻足亦赤許痺るゝ況て
その姓名の疑ふべくもあらざれごの地を投く赴く折節様々の故をもて彼養
七ハ浪速ゝ留ゝ主従二人舟行よりけゝーも旗津の湊ゝ著ゆ雲妾時も猶豫
ゝ安ゝあらねゞ素ゆく来ゆる王莽時その名を知るのこその人を認め得る早やく疎
忽の鬩戦人違せのこゝろぐゝ勿ハ竟ゝ組布れ二稔の艱苦ゝ扈従せ後
平ハ深痍を眉ゆ斯るを毎ゝ飛鳥の鵄の此角欽龍ゝ微運を猜ーゆひ
私。とのひゝ自昇をうちゆみるゆひけるゝ物くるゝゆゝび驚く手枕糸萩そを
理うとも今ゝゝるゝ慰るゆーゝ姥捨の月るゝちくゝ望の夜の影ゝ愛くや吹く尺
八の門の音律も止よけのゝあゞハゝらくうちゆるく感嘆ゝく貌を改め徨ーゝるる
烈女の魂成と敗ハ時運ゝ依れども志ハヨくゝるこー未世の美談とるさんのこ
むゝー唐山ゆる例あり魯の曾ゝ参ゝ賢人るる宋ゆも亦曾ゝ参ゝと呼ゐ

○ひとゝ人傳ゝ姓名ゝとゝの仇人ハ素ゝより一眼瞽く隻足も亦ゝ許痺るゝ況て
その姓名の疑ふべくもあらざれごの地を投く赴く折節様々の故をもて彼養
七ハ浪速ゝ留ゝ主従二人舟行よりけゝーも旗津の湊ゝ著ゆ雲妾時も猶豫
ゝ安ゝあらねゞ素ゆく来ゆる王莽時その名を知るのこその人を認め得る早やく疎
忽の鬩戦人違せのこゝろぐゝ勿ハ竟ゝ組布れ二稔の艱苦ゝ扈従せ後
平ハ深痍を眉ゆ斯るを毎ゝ飛鳥の鵄の此角欽龍ゝ微運を猜ーゆひ
私。とのひゝ自昇をうちゆみるゆひけるゝ物くるゝゆゝび驚く手枕糸萩そを
理うとも今ゝゝるゝ慰るゆーゝ姥捨の月るゝちくゝ望の夜の影ゝ愛くや吹く尺
八の門の音律も止よけのゝあゞハゝらくうちゆるく感嘆ゝく貌を改め徨ーゝるる
烈女の魂成と敗ハ時運ゝ依れども志ハヨくゝるこー未世の美談とるさんのこ
むゝー唐山ゆる例あり魯の曾ゝ参ゝ賢人るる宋ゆも亦曾ゝ参ゝと呼ゐ

なる悪根あり宋の曽参人を殺しく曽子の母を驚しく孔子の面影陽虎よ
似れば遂に陳蔡の厄難あり姓名と肢體の不具と烈女の雖言よ似る
ことも亦怪しむ足らざとの人どもうぶ氏い根塚ユーく鼠川と同じくらぶ且俗稱を
若三郎と隠居しく稚歸を語黙齋と唱るものゑぶ鼠川加二郎と又根
塚若二郎とその訓讀の相似るもおのくこれを真名と写せば聊も同じくらぶ
傳聞の錯誤い所云耳食の逐ひまるれど亦一奇談とのみ云ひて要るに言ふ
似くれども疑ひを釋せんあふぶ素生を具に告ん心を鎮めく筆の数
るねども某も北條譜第の家臣ゆえく先君最明寺殿のお時よ某をもそ
守の長男時輔朝臣に隷られるよぶ君時輔ゆーい守の長男るり
けれども妾腹るより家督ゆ立られぢ御舎弟時宗朝臣をそ箕裘を
嗣ーゆひくぶ時輔ゆーとれを怨ゑく遂よ逆謀の萌ーあり三綱将よ乱れん

とせーし時の不祥の悲しさ某折々面を犯しく諫言三たびよ及びしども一毫も
聽き徴ゆ已ことを得ぢ身退ぞく且く京師よ月日を送れど有然程よ時輔
ゆーい六波羅の廳よ居られく帝闕の守護ゆーし時筑紫の探題経高
ゆーと潛よ志を合せく最明寺殿卒去の後謀反の糺色顕ゆーを時宗
朝臣ゆく猜しそ敢ぢく京師ゆく忽地誅戮せられけりその故よ経高も
免れんーとひけん遂よ反逆の旗を揚ーよろ西の波風うち騒だも時宗朝
臣の武徳ゆよりそそも治りく三稔よろりぬ但経高の徃方あれねば存亡定ろ
るらざるのこと時輔ゆーの自滅の一條不幸よーくうぶ先見の違ざるーも亦
ゆらふ心よ快くられねが拵言く又他姓よ仕へぢ又故ありくまるぐとの地よ移り住
しーよろ文学武藝の師ーとろく弟子鞍附ーし風眼ころで隻眼を失ひ亦
風濕よりく隻足痺ころの故よ隠居しく語黙齋と自稱せり又これ

るりつゞ妻ゆく名をゐ枕と呼ゐこそ親の豊後る玖珠の豆町の荘屋
るりー折竹二三六が女児るり馬を継母の悪心ゆく十五の時花街よ売ら
まく京師六條る妓院ふりー比のとらひこそ故ありく某これを携ゆこの
地よ移り住ー後女の子糸萩を産こそ糸萩ハ今母の傍よ侍床即渠と
四稔ぢろ前ハ比同四末の龍華る。瀬川浦二郎と縁を結びて納采を
とり昏せーこその比某病著起ゆく婚姻遅滞よ及ぶ程こその次の年の春
浦二郎ハその家兄瀬川吉次を送ら為鎌倉へ赴くりーこその老母玉嶋の
物故のよーを告こ来く一下宿も苗らぐ辞ーまりーぢ今ーこ至く音耗なけ
れば女児ゝちらこそつゞ妻さえ其方の夫を旦甘春よ眺めくらーう俟不楽て噂
せ反日もるりーふ豈ゆんや人違ーとそ慢ふれを撃ふんとまる烈女秋布主
後ハつゞ婿ふの家兄るりー瀬川采女吉次の後家と若黨るんとハ送ふ

傷害のるりーハ尚幸ひよ似これども恨らく忠義の壮佼俊平と奈んのこ故よ
よーるこ条所の深痍そも命運とらひこそら痛ゆさよとらひこそる眼包を
ゑぐこけば秋布ハ面るさと又哀そも一入ふく流る涙と押拭ひいと巨細る
あん物ゝうを皆く惑ひの覚ーよろこの男ひとうを今ふらる置とうるくゐるか。
彼鼠川加二郎と又根塚若二郎とハ唆を片付く文字の大く異るを。
汐間ばりける疎図さよ如以亡夫の家弟の男姑と鐺を削ー疎忽よ
より命墓る俊平が斯るりけるも主従の昔恩より起ーること必ハ己の身を
恨るのこ恥ーさよとぞろは包ゆひこそる神の雨果ーるゐこを想像るゐ枕いと
慰ひく縁こ係る親ー兄達と。ゑる妓ゝ習ひつゞ馴れー雑力のとらひ
拙ゐ己のまふりーも此の折主の後室を組布れこ房駭ゐの透間よりけーを徭の
功名るり及今さら後悔要る兄所ゐぐ付ゐゐと。勧解ゝ額を押拭く歎息

まれば糸萩も共に睫を潤して生別ませし郎の往方を想像るゞに悲しきに
死別れなひぬる夫の為に媛れ毒の相応しからぬ仇敵の人違しく只一人なる
忠義ぬぐてこれ従者を撃ましなんば便著なれ心細さいかならん痛ましけるといひ
かけて背向になりて目を拭へば若二郎声を励して無益の諄言千萬句も
傷人の為になるよしあらんや。けしも深痍とアルあれども縡断ならや不吉をしらぬ
届かぬまでも双抱せずや。とて呼活よとてくと良人に心つけられて手枕をとり俊
平が同じくに寄ゆるをかけて扶起せば漬る鮮血に声を隠らしく。やよ喃
俊平とのとせらん。おのひしに似ず痍は浅かり心をたしかにしなんかしやよ喃々と糸
萩も倶に右より左より声を合して呼活せば俊平眼をアひらきて左見右アん
けて息を吻れ灸所の深痍にあるれども。そが侭死も果ざるしを面目なきに俯く
をり圖らずも竹く若二郎との御夫婦の物かたりにて因果の道理を悟りぬ

喃妖れ毒。二三郎ぐゐぞ幼稚れ時に別れしかば迭に認忘れたりけるを。おのひ
かけるに對面にてそといふに手枕驚れて。こらいを姉と呼かけて云云と名告せ
るは原来おん身はこらいが為に異母の弟なる二三郎にてありける歟。おもて浅ましや
何とせん二十稔あまり信るに弟に環會ひながら迭に鏢を削るまで挑戦ひ
賸痍を肩ぜしてを悲しけれと歎けば倶に糸萩もおもはぬらび胸潰れて末
期ながらに叔父姪の涙とこのに名對面なるにさなぐに勤せば秋布も亦驚れ
嘆じくいとゞ哀しく痛しく思ふのから有繋に羞てうち目成るのに双抱を
手枕親子にうち任して間近くはいまだ泣ようなれ又若二郎にて手を又れ眼を
閉て観念の外に他支もなかりけり登時俊平は突立なる手を置かえて又
数回息を吻れ喃姉れ毒さのこは悔に歎れなる某が斯なるとも皆是母の
悪業のこの身に報に因果にてそかくいへば親の非を顕せに似たれども むかしこが母の

悪心にて父に勧めて河竹の流れの渕にあん身を沈め。その身價を私しくよろ
らぬ人とまうりぬひし。家の乱れに家そのの大人は氣病に患て。世を逝りぬひ。
家産断絶しくければ某は里人の好意によりて肥前國。御厨の郷に赴けて。
瀬川健三道孝ぬしに童奉公せし時より。母ぶこの氏を冒して村澤俊平
と名告たり。然りけれども心に羞てうぶ母のうへはたらん故郷のるも人に語ら
む素より不才なるをもて。道孝吉次二代の主に廿稔あまり仕れども果敢
果敢しき功もなし。切て主恩を報せん為に後室のあん供して三稔以来艱
苦を辞せず。仇人を索廻れどもいまだ仇人にあふよしもなく。非命にこの身を
果せる。親の因果の子に報ひずは天道忠義を憎むといひん歟。しかはあれ
ども某が心に亦復恥ることあり。仇人を討しまゐらせるべ。懺悔して法師に
ならんとおもひしても空望なるべ。いかで死んは罪深かり。後室さるも聞し召れよ。

曩には長れあん病著に某日夜看とりまゐらせ。起臥しるに度毎に親しく
ゆ抱しまりし。その折聊心動なく。ふく憐をなりしをおひ久しくみづから誡め。
さまざま迷へることはなるをこの比夢に衣縫ふたり磨備前の堺なるは大山峠の
麓にて。慢にあん身に迫りて挑こく迭に争ふ程にあん身は命を隕しぬひ某も亦
後悔しく肚れ切ることおひて忽然として覚ふけり。夢は五臓の労れに成ば。
戯謔なりとも思ひより出ずといふことなしといへば。このる人はしらずといふとも。こゝ心に
羞ざらんや。大約邪淫の人を傷ひ。みづから害に誡のよく守ひたれと夢に
ごもかくの如し。御同に恩人安名氏の某を熟相しく色慾の迷ひにより。その
身を愆ることもあらんと誡らせてるその言の違へるに似たれども。こゝ母の邪淫の
悪業竟にこの身に報へるならば。これも亦色慾の迷ひといはしし。讖は違はず。今は
千萬悔むも甲斐なし。唯願くは姉御前御夫婦。便りせてるに後室さるの。

助大刀しく仇人加二郎を討捕らしゆいらぶよりや千僧萬巻の讀経ゆも
ましく成佛せん頼まうまいこのるのこうけ引ゆとかれ口説く声も弱りて血は
塗まてるるを戦しく伏拝む忠信義僕の今般の懺悔ハ理アと逼て哀れ
るりを枕等くは堪かねてよくとだろりは泣沈こえる涙の間は頭を擡て喃二三
郎否俊平とのおん身の母れの心操の好もあまこりもあまこりこらいが為ゆも親と
いふ名ハ削られぬ養育の恩をしらべ河竹の渊瀬は沈められるも時の災難この
身の薄命況おん身も棄られて艱苦を歴て良主は仕へて忠義を盡せ
るよこいしらぎしくるまにかけし姉をうらまぐ身の宿業としひ諦めゆひぬるさしも
心の怜利を汲アてハる事最惜しやまくもあらぬ姉弟いつくまぐも睦しく世ゆし
在りるが憂は就樂なに就て憑しれ相譚敵とるるべきは會ふを別まの悪
因縁おん身が母れの業報ゆく姉は敷まるゆめるらぶこらいも花街はありし時

客を詐謀アと身を脱れる。報ひにはよりて只一箇るる弟を殺せといひれやせん。
哀しきかると声立て。泣ひ喞ひ繰返せ。苧環るらぐ糸萩も涙の雨に頭
垂れて。痞押るも撓げるる三人の間へ秋布も膝を進めてやよ俊平疾ゆも
ものいひこうやうしを親族達の愁嘆と吾倚の疎忽に恥らひて先より泣く
ゐるぞやとの年来の忠心義膽心ともるれ夢寐ぐも心は留めしハ潔白の心も
其処は顕まて痛ましともいと惜しともいひ盡されぬ哀傷悲愁の事せハ
絶てあらぎかし。如之ハ神ゆも佛ゆも捐られてりけんこれるがら宿世の業の竭
ぎして世に存命てあらん限り朝る夕るの唱名讀経は和殿の菩提幾
吊ん願ふハ一念正覚の往生せよと薦めてる声笑えてや俊平ハ然も歓し
げに点頭のこと登時あるが若二郎ハ必ずるるを釋て空うち仰ぎて嗟嘆は
勝ぎ嗚呼天るる哉命るる哉しふはましる村澤氏果敢るれ夢をもふく

羞ん唐突の心潔ー且その死に臨ぐ一言も私よ及ぶとるく只宿業拙感ぎるのこつぐ身の為め妻の弟是假初の義よあらぐつぐ身ハ隻足不自由めく旅行よ便りを為ぜとのふも杖よ推ろ車よ坐ーとも後室の助太刀ろく仇人を斬るそやら己んこの義い心安うるべー願ふよ一ト宵の悪夢も恥るく人の誠るよろ罪障も亦重ろ向ぎくうよ似くれどもつぐ妻妓院よあり時某も浮浪ーく花を索る蛺蝶の香をろろーを通ひ初くるふ浅ろぎ契るのろろ財盡てのつとろく夜も稀よなりー比る枕の上毛る。木瀬屋厳金吉とふ商旅る償身されく上毛へ伴をゆく道中ゆく身を脱ぬ影を隠ーとろぐ浪宅よ索ひまの箇様ろろと由を報くく願ふ夫婦よるろんとろう斯りくぐ今ろろうろ非を飯るふ似くれども甚ハ性とーく道ふ違ふるを好まぐ殺の財布を費せ一人の伴よ遊女の道れまろるを幸ひかく相伴ぐ賊まるあぐも

ぐるとぶひーろどる不古ハ生くゆくろぐと泣ひ詰る女子の一念かひく折言ひよりさえある懐よ入る穴躬鳥を獵まの人の渡さんやと忠ふ身勝よ弱ー気の過失。遂ふ枕を携乃さこの地よ淀れく人の師とろろ浮世を渡る程よ病痢ふよろく耄弱不具の行歩も人並ろらざる人を掠めー天の貫罰剰女児をも堺ぬの浦二郎よ添ふこ泊るろぐ旦莫春の比を忠ふと昼さえ人の出示欲ぐと快ろろぐありけるよけふ亦よ枕が弟とまろらぐ斫倒せーもみる罪悪の報ひよてと観念されが禍鬼のる尽寅縁くつぐろ人よ甚麻ろる出示をろるまもろんこれも亦測くろりこれよ由く彼を忠へ村澤氏の罪障讖悔ふ想像の過くるのを吉次ぬーを世よ在ーめく今この人の忠魂義膽を面よよろぜるる感むべしくと線返ーく慷慨嗟嘆の瞼を頻りふ屡動ハ外面よ立旅虚妄僧の折戸を推たく咳ふく

めぐりあひくてーやそれとも分ぬ間よ雲隠れめー夜の月ろ肌行莫暮ー

たゆ修行者ゐ今一雪の宿りを辞思ひせめのと両人亦月一呼吸く進入りつく天
蓋を掻取捨さ縁頬より障子の裡面ゟ推並ぶを秋布ちく見入りそ。
驚ろるゝう遠一く身退へ寄さこんかうんゐ。ゐひらけるや采女さゐ尚存命て
をハせ一欤菩七も差ゐくうち連拉く来ちせ一ハ夢欤現欤亡魂の狗幻ゟ顕を
ゐ欤綽の容子を生てよと推乃るを掻遣ゐ推分る糸ユ秋も亦忙しげゐ喃
浦二さゐ差もるく何の程ゐ還らせゐひ一舎兄の仇を斃ゐんとそ旅虚空僧ゐ
姿を窶一く諸國を徧歴りゐひ一欤生別れ一くちや三稔長死月日ゐ只
一下こびもかうゐ譯と玉梓の信告せくゐざやう心つよや。と処心ぢれゐる枕も亦
共侶ゟ絶さ久一ゑ浦二どの妾支の對面めでゑや。と欤ぶ親子を推退る秋布
いとゞ赤さちく喘つぶ丈ゐん刃の仇を斃ゐんとく旅路ゟ三稔を送りつ辰諏
難苦労ゐゐゞうもゐる毛不測ゟ環ゑ會ゐるもなゐちるりくそ動の
濱ゆく加二郎ホゟ斃されゐひ一亡骸ゐ波ゟ引れく徃方も去れぞと止一く倩
行ゆうゟそ虚言さ仇ろう一欤前ゟ一頭髪言の二髷ゆくび結ぶ妹と仕の縁一
嬉一ゑ再會の譯を告うう一くゐひとゐせも果ぜ糸萩ゐ襟上取くう引戻ゝ。
ゐを無礼過さる人のぞあうさうゞ男ゟ馴々ちくゐん刃ゐ心の乱ゑ一欤。とゐと仇
る窘ゆく二人ゞ間ゐ推直れゞ不日然ゐさせ。と秋布も眉ゞ魂角芽立ち。
蘆分舟のうけさ女児の加勢ゐゟ枕も。乳色変りく立まくちるを若二
郎やゝと呼禁ゆくゐち大人気ゐ一ゑ枕さ覚ゆうぞゐと駈ゞ一糸
萩も慎ぶゐゟ枕ゞゐゆう弟糸萩ゞ為ゆ只一ゝちらう。小父俊平の臨
終ゟその面影の違ぶとも人と郎を争ゐの旦ゑ狂人の所為さて誰ゐ遥奔と
いぶるべ宛宣ゑ員許の限りゑ退ゑ居よ。と高呼ゐ叱り懲一て坐行坐喃浦二
郎とのゐる目ハ誰も違ゐゑをこの秋布の刀自も亦和殿をゐそ良人ゑ今ゟ

舊怨易解
新怨難遺

綽のもろをゐくて。おそ邪猜ゆゑもろねごも二稔の程より秋布とのと夫婦の約束せられ欲壁言ひ色に迷よとも嫂と不義をぞ白ふる和殿ゐうんとのつやく吾曹の迷ひを解しのひと詰ぞ吉次勝を進めく初ては根塚氏曩ゐ某等圖らずも外面ゐ立在て仇討の吉又の錯悞俊平が不慮の劍難且人々の問荅と懺悔の由を洩ぞ。圓居ゐ入らでや。と思ひごろしゐわろねごも悲歎ゐ乘妾時胸も塞ぎ將辯の舊を折らでとく稍只今ゐ及ぶる某と浦二郎とが雙生ぞあり日の面影の似くゐゆゑ語音應對進止咲くまでも違ぶとうをのそ動もまれば兄を弟と思ひ謬ち弟を兄と認違ふる日比親しく逢ども猶ゐ錯悞の間々ありしを況對面一両度その後別をく年を歷ふり浦二郎ゐ某を浦二郎ぞと思ふれしゐ疎忽よ似く疎忽よあらぶ豫くも愚名ゐ被れく某ゐ浦二郎が兄瀬川采女吉次ゐ又某ゐ立代ぞそ。相摸ゐ動ゐ濱ぞ開川加二郎ホと血戰しく大洋ゐ漂沒せしゐ則弟浦二郎ぞ。さぶりゐ出ふりゐふるく。益凝ぶん旅縁由を詳ゐ告ん人々靜ゐ守ゐ久秋布もよく佯ゐ去々歲の春の比某矢田の陣中より牛淵九郎清繩を追蒐て末の龍華に到ぶし時圖らずも実母玉嶋弟浦二郎ゐ環會母玉嶋ゐ義よりく忽地ゐ自殺しゐ叔父清繩も先非を悔て倶ゐ刃に仆せし折某を熟相しぞ。必死の危難近ぶよあらん弟浦二郎をゐく代よとのゐ既ゐしく鎌倉よりこの日到着のあん使博ヲ倍太郎索ゐ來ゐく某を召ふべさよ君命を倩へりさぶれ実母の喪ゐよあれゐ柩送りの免許を願ふく弟の家ゐ七日ぶり逗留しそあらし程ゐ浦二郎ゐ叔父清繩の送言を固く守ゐく鎌倉へ趣ゐく某が厄難ゐ代らんとのひしく然でぶり身を脫るとも弟を殺ゐ意ひあらん。

加以吾君を欺くの怕れあるぞよ。その義は一切後ひらくと推辞つ綽の果ぞれは所詮同胞共侶よ鎌倉へ行んとのひーよ浦二郎は伊萬里へ行ん根塚氏の獨女兒糸萩とのと婚姻の約束あるよりを告く東行よ尚餘日あらべ辞別よもうべきとく高量定ろ私ともよ鎌倉へ同舩ーくもんとあるべ遠謀ろよ似うの願よの雲時某よ姓名を借ーの出航の日よりーと某は瀬川采女吉次と假稱ーく官舩よ乗て東よ至らんぬ又瀬川浦二郎と假稱ーと陸地を鎌倉へ赴んもよ幸ひよあらく水陸ともよ同胞無異よ東著せべあらく名字を舊よくーく各々衣裳を脱改め扨鎌倉よ到るとは君を欺く偽難ろく迭よ運を試ふ方あの某は舩中ゆく災害よあひぬるとも嫡家繁昌まるとは聊も憾ろーこの議をうけ引ろべは今宵よ腹ろ死切く未然の厄よ代らんとぞ思ひ決ろ面魂よ某竟よ争ひろく僅よその意よ任せーべ浦二郎歎びて然やらばあすの夜の暁よ某が衣裳を被く伊萬里へ行く根塚氏親子の人々よ云云と。生ろく辞別をあのへーよ漸く相識る彼人々の聊も疑よとろく浦二郎ぞと思ひいをろべ鎌倉まで同胞が名をとり昏く赴くとも影護ろへのろーとの義よ後ひらべのひひと真実立く其くを否とのらんさばゆくとれぜろその意よ任せーべの折ふく来ぬるの浦二郎ろぞ某とゆくて末の龍華ろる宿所へ還れべ弟のをろぞ出居の杜よ送ーる消息あるを立とろるよ某が伊萬里へとぞ歩くもれぬるその日よろん博ヲヌ倍太郎より書翰到来しーく東行を催促せれ且倍太郎ろの暁よ陸地より帰府をとろの旦ぞおより浦二郎が某が甲冑を被て某が後者を具ー先矢田の陣中よ到く実政ぬーよ舟行を鎌倉よ赴くべーと亦某ぬ浦二郎が衣裳をぞ行装を整へ家をぞ鄰ろ荘客们ぬ委ね措て奉

鎌倉へ還らむへく孰も遅速あらとおもふとも藤澤あたり俟合せんこの意をうさせめと
あり某これを心忙て形の如く准備ふ潜びく獨陸地より鎌倉へ還る程ふ起初の
日も後れふ浦二郎が乗る船の日毎ふ順風ふうけるあや某ふ先ふうこと大約十日
ばかりふぞ一叔某が花月の比稍藤澤まで来るふ鎌倉の風声伝へく浦二
郎が動の濱あたり鼠川加二郎ホふ殺されふ亡骸が波ふ引きて忽地往方も知
らぬふうふ又某ガ伺男博ヨヲ弥四郎ホふ既ふ誅戮せられ
たりとふ巷談街説定ふられが某驚死且うち歎ふく進退あふ谷り一線ふ
この比経高が所在を索てよく討捕るのあらべ如此々々の恩賞あらん縦罪
あるのとふともその罪を免されんと徇させのひんち下知の市中へも伝へべ某熟思ふ
ふう叔父清縄の説相違なぞ某ガ名を冒ふる第の果ふく災害ふ命を喪ひ
ぬるを悲ふけれ然ふるを又今ふうふ某鎌倉へ入ふうふ来ふくば綽云云と伝へあげ
ふべ私の相謀のそ第ふ姓名を仮ふる忌慢の罪ありとせられん
あん然あも測りふくふく且吉次の道中ゆくく厄難あらんよりを知りそやその面影の相
肖ふる第ふ己ガ打扮ふくふく加二郎ホふ撃せんの全く命を惜めるとふ人ふふられ
ん由朽をつめべ所詮且く世を潜びくふ第と冒男の仇人ふる加二郎を撃捕るべく
并ふ賊首経高ガ所在を索ひ擒捕ふく鎌倉へ奔りそ参らべ恥を雪め面を
奨ふも旨ふ優ふる大功あらんと肚裏あそ号思をふく旅虚ふ僧ふ打扮ふく。
安房上総へうち渡ふ下総常陸ふべ越路陸奥の尽処ふくも偏歴
せふる所ふく公私の雛言を索ひふく旅宿ふ年を閲ふるのふらふまざ便りを汐ぎりく
ふこの春ふ京師ふ浪速津を経歴せよふる夜関甚衰七ガ宮嶋畔の邉ひ
ゆく荘客仆我撃ちふく逃れ去ふるふ圖らぬ遺ひ奴ふより秋布ガ後事を
相具ふく二稔仇人を索ふるも及ふの里ふ加二郎が隠れをきりと伝聞て。

西國船ゝ便りを求めそやうち吉ぬと廿衰七が報ゟ哀歓みづから林示せば綽の虚実も勝肩の程もおのろとなく岸ゟ此地ゟ到著せり某ゞ実母玉嶋の三浦泰村の忠臣ゟり一岬平馬ゞ女児ゝ岬氏そその先祖龍神の子孫ゟるの腋の下ゟ黒子ありその形鱗ゟ似ゝ某ゟ同胞も外戚の血統を引てや又腋の下ゟ黒子ありぬ某と浦二郎と聊異ゟる処あるの某ゞ総角の比武芸塾の試合をせ一折ゟ木刀ゟ臂を破られ其その痍の迹右のくぞまあり浦二郎ゞこの痍の迹ゟ一これをのく證とせ一旦ゝ袖を塞げ糸萩ゟ枕ゞ只の故馬ゟ示せ一ゟ二郎と袖を塞げ糸萩ゟ枕ゞ只の故馬ゟ示せ一ゟ果敢々々ゟく応もなせば其中に糸萩ゟ郎ゟ目を注ぎるのを忽地望を失ゟく果敢々々ゟく応もなせば其中に糸萩ゟ岸ゟ難々声立くよとぞゟ泣沈む涙ゟ胸の昙雲のそゟ疑ひさゟ霽ぬりけり。

松浦佐用媛石魂録後集巻之五終

東都　曲亭主人編次

第二十四

舊怨を釋く善新怨を購ふ

登時根塚若二郎ゟ瀬川吉次ゞ物かうふ感嘆しく髀を拍く奇ゟるうるその相肖ゟると相貌身長語音まぐ兄弟一毫も違ゟぬのゟ雙児とゟとも稀ゟむ一唐山ゟ張伯階とゟふのゟそゞ弟を張仲階とゟびゟ死兄弟よく相肖ゟると壁言ゞ影と貌の如一有此而ゟると死仲階ゞ妻某氏ゟと唯妍ゟ化粧ゟ兄伯階ゞぼとゟふゟくけのうちゞ結髪善化粧をなぞよくゟ美一うてを伯ゟゟと。とうち戯まく伯階ゞゐをさうんとしてけまゞ伯階驚ゟ訝ゟく。おそうゞ弟の仲階そ。と思ひたゞべーのゟうん。ともゟくも悟ゟくうち微笑これを是伯階ゟ仲階あらぞうー。とゟみその妻

駭差く忽地走り退く。姑くして又伯階。端近く歩く。イそを
のつま。彼妻亦遥かに。あるに真のつゞ夫と。思ひて身邊に至りて。最妾ゆゑ妾
思ひく舎兄をおん匁と認違へて。礼ることをひ仿りて。と恥ぢーと
生るゝ伯階いよく呆きてくこれの是伯階なりと乍。麼何ものをいふ
と漫えと。君まだ彼妻吐嗟と驚死ぬ便
室このことをりく。稍久しくして出ざりー。又白波兄弟のそれな似ぢう。鄙ふ秋布の刀
自と糸萩と。迭ゆ郎を争ひ由日を同うまく語るべー。亜益の辨ゆ仿さ
きどもつゞ女児糸萩が戊の未の年己の午の月戊の未の日己の午の時ふ
生れうのまだ自然とその八字の。八字の生れ年生れ月生れ日生れ時ゆ。土ゆ属まるのこゝろぞ。この
日門人某甲ゞ萩の早咲を贈りまーこれば糸萩と名つけ。有此而後よ
よく歩くが萩の色ゆ依らざまだ。伏倒れて立と難ゆ。壁言ば婦の夫ゆ依りそ。

生涯を送るゆ似ぢう。ゆゑふ糸萩が瀬川浦二郎と縁を結びく。
婚姻を敕まぎ生別れーく三稔の間俟不樂ぢうー甲斐もなく凶計を
うふ必ひ細りく病のおせんと必ぢう親の思ふゆ面目なく。とらひかけく。
頻りゆ嘆息おぢうーふべゆ枕ゞ憾ぢうの。吉次も秋布も慰めうもく共
侶ゆ頭を垂さくおぢうけん若二郎貌を改めく嘻ぢれるゞうら自許ぢう瀬
川氏の倶せられー関蓑七とのとゆうん小くう死処ゆ居ゆまゞとも。誘ふことうえ
進ぢうえ。と容を漏さ仮あるゞ能ゆも蓑七ゆまゞ心をせまぎ。先秋布にうち對く
奥ざる最も面ふくゆけん仇敵なの錯誤。其ゞ只俗語を信じて。妙くもぬ
ぴゃーよふふ俊平をさへ喪ひぬ所云一吉次ぬ。一犬形を吠ゆふ似ぢう。仏ゆれども御教書いとり復ーそうて参宇ある量義ふ
犬無形を吠ゆふ似ぢう。仏ゆれども御教書いとり復ーそうて参宇ある量義ふ
酒楼のほとりゆく別をなりーよふく宮嶋眇へ走りゆるよゆ。逸止歩ーく。

荘客们うち聚ひて死骸を撿て囂々と衆皆評議區々に當下某ぞ
せう荘客们は三人の死骸に心を奪れて。いまだ彼御教書をとり揚ぬに
暇るからん不意に發て搔攫んに御教書は駕籠の裡面欤然らずして
駕籠のほとりにあらんよく見定めて取らんぞと尋思をして近つ程に月は
いまく隈なくて塵芥もら分つに足れやかくて件の畛路へ出かりてるやうに
しく。こゝんれば果して御教書は油紙に包める侭ゆて。駕籠のほとりに送て
ありつゞ物ゆゑと走り進て。めをもいはず御教書を搔取やまんなく逃んとす
ぬば荘客们駭に叫ぶ素破癖者ぞ逃するとて六尺棒を遣り違
しく遮留んとしてれども跳踰て走去るを見脱さじと五七人追近つを
搔抓ぐ或は投退け打倒し辛しく脱れて千日寺の邊に至るに追來る
めにるゆけり且く息を吻く程に前面より來る旅虚無僧のたや行過

んとしてけるが天蓋の窓よりして某をつらく視て和殿は蓑七ならずやと
呼かけられてうち驚れ。あん男は誰ぞと問へせば是則采女さるに送に訝り且
歓びて過去しかたを相譚んと此ものから暇るに。つゞ身危窮の折るまゝ。
只云云とその夜の夏を辭急しく告ませしに采女さる又駭れぬひて。こゝ天
蓋を脱取て某に被らせぬひ。相伴にて通宵路を走りて佐界に熟
見より日々に年來の物かたりを仕り又とし來のあん物語も備細に兼りて
歓しさに大かたならず又悲しさも一入るに先たやこれを受とりぬ。といひたく
仇討免許の状を項に掛る幼推外しく。秋布に遞与せしかぞ。秋布
これを受戴たて今にたゞめぬ和殿の働れぬてびゆるに御教書を身に
恙もなくとり復したる。功の高れのこゝろ。つゞ夫にも環會て。おく伴ひ進らせ
ぬひしこの績は神明佛陀のその忠信を憐ミぬに冥助もかゝるに籠まるなり。

彼を出し此を出ふ欲しさに就なく亦薄命なるは俊平のミ嚮に家刀自
妙れ達の双抱を受しとは。ものいひけるが程もなく。縡絶にけん音もせずいと
痛しけるなるぞや。といひつも亦目を拭へば蓑七これを慰めて。なうなくあるゞに
うち對ひ向に辭をかけられしを秋布の君にまもべき一大事の口状あれば。いまゞ
応に暇なるやし。不敬を免しのへかし。瀬川殿の舎弟なりし。浦二郎殿の
烏には。壻冒男にてをはれば。おなじ山路の谷を隔て。下流を汲る心地をする。寔に
あるゞの翁には。初ての見参なれども。内室なる枕とのは。豫てより。認てぞをはし
ぬ。なれもかん目をのはまたし。と辭急しく口誼を述て。膝を進めて燈燭の
ほとりへ顔をさし出すを。なる枕はつゝくと視て。忽地駭きて。嘻あんなりけ。といひ
かけて。逃隠まんとする程に蓑七はなに合る。銀の釵児をなる枕が裳へ丁
と打たるを煉は違はず。席薦へぐさと縫留れば。臀居に撞と輾びけり。

當下蓑七声高なに絶て久しきなる枕との。和女郎の目にも蓑七をむかれ
客の上毛商人木瀬屋鑿吉とみられし欲いるにぞや。と呼かれば。若二郎も
亦驚輾しく席にも堪ずみえたりしを忽地出ひかへけんなるを又ぞて黙然たり。
有然又なる枕は脱れかたしと出ひて。打かけられし釵児をなうなくに抜とりて。咽喉へ
突立んとしてけるを蓑七ちまく衝と寄て。腕捕て推禁め。なに何なるぞ。狼狽
なふ欲舊怨をおもふが面ゑにこれ豈和女郎を殺さんとく。たるぐかへ索て来んや。
打かけたりし釵児はむかし近江路の客店より。和女郎が逐電したる折迹に
送りしものぞかしそを今までも失はざりしは和女郎に心の送るまあらば。環りあふ
日のありもせばこれを返しくこが胸中をしらせて安堵させたや。と出ふが所以の所
為なりけり。虚言をもて客に媚可惜財貨を亡はまるに。なべて遊君の沿習
なるに実言と信て産を破るは皆その客の愚鹵なる迷ひの致す所へ然るを

さとり悟らぐ遊君を恨むいふく愚おろかなれども昔その一人そふく
和女郎ぢよろうが心地惑ひくヨヌくもあらぬ本銭を失ひ賸彼此よろ受うける絹を
引債おくかの身價の金三百両をもう多くの調べ。償身ーく程もるく帰
郷の途より逐電せられーその折ふしと媚く腹たーしの限りうえを往方知れ
ず跡せん術あらぢ空ーく故郷へ帰ーぐるヨヌくの債ま生活の便著も遂よ
るくちりく獨鎌倉へ赴くく博ヨヌ厭ま仕へーより志を改めく先非を悔ふ
て大くさるうび上毛よ在ー時も武藝の好む投らればいふく倍心りけそ大刀抜く
術も覚ふり今ちら必べござるよ和女郎が則善智識悟道の祖師ぐありけ
ると覚てお怨もるーむーとめが和女郎夫婦のうえのさ無旦之上恥るん
やつぢうへるも亦羞ぢ狀ぢを此一も諱ぢーそむーの名さ失ふるぬ死心のお
きぐべ不覚るるまのぐると。理うり迫く制もれば。枕いとぐ面るくて流る涙を
押拭ひまろびられぐる程苦ーそのうえふ佐の数るる女身を寵ーとく汚
くる死財を費ーるまく苦界の苦を抜くのひー恩を仇めく逃走うる罪科の
重死を知る女ふ佐れども知りく必ず止くる死只身勝ふるる悪の欲天道許ーぬ
跡。久後ん斯るる談ぢうー禁ぢよ死ーぬのひとりひるも亦泣沈めば若一郎稍進
出蔓七ふらち對ひく連愛ふ死丈夫の魂海るる曾の膚ぢよ羞く何ぬも
ぐひ難うさぐれむーる枕が三百両るるの身を偷く走うーを知うるも相伴ひー
某も罪ん免をぬ相籠ふ人の財を賊まるる王法律家の凡さ及所幸ぬて免
るくとも恥又これうる大るるるー覚期極めくいとぐひも訴らぢ脇挿の刀ん
柄よるとうけく自盡せんとまる程ま並衰七透さぢ推禁めく正るうん根
塚ぬー内室へさられくれん御遣も惑ひぬひ欲總夫婦共侶ま刃ふ
命を断ぬんとも。その日の情死とらまくのこ誰う潔白の人とせんや三百金ざ

贖ひあらず作りし罪は自然に滅んされらの理義をいはずやと説諭されて若二郎もまた枕も稍頭を擡て教諭寔に味ひあり然りながら縱家産の田も圃も悉皆沽却しても三百金は調ひかたしといへば蓑七微笑て否某が望るものは銭財のみにあらずといふを夫婦は訝りて尓らば又何をもてこの身の罪を贖ふべきと問ば蓑七されば とよ浦二郎殿は貴方の壻なれば悌順にして厄難を舎兄に代りて身まかりあらば糸萩との憾はたらえ二親達も朽をしくいと娼くてもおがまらめいはんや又いはる春采女ぬしの舎弟に代りて一ぶんとへ来ませしと欲偽をもて謀るものは又偽によりて敗ることありとも亦御邊親子の怨を釀まるべきなり且采女ぬしと浦二郎とのと分釐も違はれば今はらその人ならずといふともなほ疑ひは解かたからん これらの疑惑妬忌遺恨哉よく令弱に説諭して一毫も恨を送さず瀬川御夫婦を相資けてゐる仇人加二郎が所在を索ひ賊首經高が隠家をもよく穿鑿て大功を立させまゐらせんと誓ひあらば某その謝義として彼三百金を進らせん然るとは二親の舊悪を雪め盡せる糸萩とのは孝女といはれんうけ引なる欲いかにぞやと問まで夫婦は歓びの心氣色に顕れたるそが中に若二郎は幾たびとなく頷ひて適微妙くいはれたり數なるなれども某も亦是男一匹之感激のあまりその議に任して糸萩に説勸め疑似の恨を解まべし非如女児は諾ひずとも某かくまでいふからは この義に障りあるべからずと夫婦誓ひをまくければ蓑七ぬかく歓びて懐にしたりける昔の購身券書をとり出しうち披ひて若二郎夫婦のほとりにはし措今約束の三百金翌とも延さでまゐらはるとく受収めあひ給ひといふに夫婦は感涙の落るもおぼえず受戴たてこの時までも俯沈たる糸萩に云云と報知らまゐらせども糸萩は涙に烏れて応をなせば吉次と秋布は蓑七が理義分明に人哉

罪せで迭に利しる方覚の灼然るを只顧感嘆ならける。有如此程に俊平は。一声云と嘘くにぞ人々齊一見くらて嘻ちろにぞ。縡に紛れて双抱にいと笑る閑るりたとひひつ蓑七吉次夫婦手枕も共侶に従右自左進ミよりくやよ俊平村沢氏縡の趣の笑えし歟吉次は恙るし蓑七も還り来ら甚麼ぞや什麼ぞやと諸声一齊問慰めて抱起しつ勦れば俊平僅に眼を開おく。左見右見て笑の中に心撓緩く轄忽離と忽地息は絶にけり。噫とばかりに泣く手枕が覚て空しき夢の迹浮世の秋と秋布が倶に唱る佛名の南無阿弥陀佛阿弥陀仏阿弥陀るみぞの諸時雨夜風寒けく更闌て夏るに宿ぞ哀れ明る。

第廿一回

執念利鎌に入て夫妻を追ふ

却説関蓑七は若二郎夫婦と商量して俊平が亡體を桶に歛めるどしつ。その暁々とは擡出して背門より一町ばかりある田の畔の墓所に埋めて。雛松を栽て表とし詰旦若二郎は能化寺の法師を招きて追薦讀経叮寧に俊平が菩提を弔ひけり。その事果て若二郎は吉次主従に相譚せう母屋とて幾間もあらぬを夫婦主従一処にをいさば心詰りにあらんぞらん奥庭の前面に細小なる離屋ありとは某が里人ホに武藝を教へし比稽古所に建てる久しく人は住ひども舊なる侭に網代天井もあり。席薦も今に布てありけれより彼処へ移らせまへ朝夕の食物は母屋より進らせん近属世の風声を傳聞しに彼経高は西海に今なほ隠れをるといへり然りけれども その隠宅を定るにしまるものなしとぞかなほ便宜もあらば今茲はすこに杖を駐めて経高ホを索ひ出へ某も亦との義に就て凡ちてろの及ん限り穿鑿まべくしといふに吉次秋布蓑七主徒齊一歎びて一議に及ばず。その日より根塚が家の奥庭なる離亭に移せけりとてする程にはや俊平が初七日の逮夜にも

假を認めて真と
未通女の怨言

るゝこそ吉次が今朝とく〻も枕ゝ御道すせられて能化寺へ詣しが亭午の比ゆく来めけり抑この能化寺の本尊ハ平将門が女良ゝうける如藏尼の作佛ゆく利益ありとその昔有此者只俊平の為のころ〻浦二郎が冥福を祈らんとその所行ゝれど又未の左側より秋布の蓑七を招き件の蘭若へ参詣を見之田の郷道すめゝよ若二郎が杖の拂乃ゝゆくめりこの比ぞ糸萩が只の吉次を浦二郎ぞと必ず凝の解げれが妬ある毎ふ鄙ふ蓑七よ唯諾る事の情を説示しとさゑぐふ諭せども糸萩が只うち泣くのを心地と煩しとく無笠竜く便室まをり強て意見を加ふ衣引被だうち臥しも三べの饌ゆも向ひ二親もとそあまりく心苦しく必ずけやとうくまる程ここの日秋布と蓑七ハ能化寺へとく歩そめよ父若二郎も案内ふ立く留守ゆその旁と母ゝ枕のこと且吉次が只のひとり離亭まあらしゝ。

糸萩窃ゝ欹びて日比の恨をらんと必べき衣脱更く離亭へ赴けりゆくとも知らず吉次の徒然ゝ勝むも倍寓柱ゝ背を合一尺八の笛密音ふ吹まきみく餘念ゝ折ゝら此方へ来る人ありく。庭木履の音あくけれべ吉次急ゝ見則別人ゝらぞあるゝの女見糸萩ゝまべ俄笛を側ふ措てゝらゝ糸萩との来まをしゝ欹ゆ比ゝり病著ゆそ無笠竜てのこそゝまると俄しゝ違くゝえゆゝ。

こゝ寄れど背向なりそのゝらぞゆゝ座くゆく尻目ふゝくゝ嘯浦二郎さゆまぐ添臥ゝせ奴れど親と親とぶ約束あく。伎の山迹ゝらぞも土と火の相生さゝ吉野川淫ゝ契りを増花ゝ岩ひろえさせのひゆそのゝ虚言を正げよれゝ兄の采女ゝ浦二郎ゝゝ多ゝ代ゝく人ふ聟ゆまく亡ゆゝとのひゝらく面りよふ妹と楽しげふゝまぐちゝ縣ゝり毋。

つぶ〳〵ころ秋風小匂のあら波うち返〳〵晝夜燃る火の國も心ぞ〳〵の盡て処と〳〵に憂をそふるめの浦寂てあはれとの謎々欤心つゝと身を揺ぶく席萬の綻掻捻り涙とも小怨むれが吉次いと笑つこれるゝと泣ども情らうに。如右出るをゑ犯るらねど他〳〵女子よ迷へる為ゝらぞの偽る死儘ゆも諭せゝとのぶう浦二郎あ辟肖ふ疵るゝ〳〵今眼前ふ同胞が雙祖ぞ〳〵を厄るべその疑ひ氷室成夏の冰と鮮易ふほを憾らく浦二郎が世を早うも去つるとあん刃のごうへこれも亦腸を断歎死ん欤りけれども尽憑〳〵たいる日よ秋布が阿川湊ふ舩歌りゝくいと腫張る乞者をえこうそ折浦人のゝりゝへ件のと者ゆ去々歳よ春向の磯よ流寓りあ死身よ金瘡さえおりゝかと里人の双抱あく甦生ゝりゝそのぞとゝくこれよりそ秋布ゆ倘吉次よあらぞやとゝ出ひよけれど面影変りく似るべうもあらぶりゝふ件のと者ものをるらぐ且秋布主従をゝれども認ら返面色るれがそのゆあらぐるべゝと出ふりのゝら憐そ併を買〳〵取せんとそ舊ゝ方〳〵五六町立〳〵る隙よと者ゆをゝべるりゝとぞ。有此者と者ゆ吉次が宛鬼ゆのやありけん欤とく送憾ゝさよ泣ゆ死。秋布が吾倘よ報ゝ旦時まぐゆ仇と出ぐのゝ彼と者ゆ浦二郎が亡魂の顕れ欤尚死るぞゝく現牙の世よ存命てあるめるゝべ竟よ再會せぞやゆ已ん近死日ゆ向の磯へ索行すく欲されゝ。綽の虚実の定ふ知まんそのゆ吉左右を俟のひと諭せゆ頭をち掉てつゝ出ひきらせんとく両人窺よ謀合せゝ弊巧よるれるをのひゝらく賺ゝべ。それを誰ゆ實言と甘んそやよゆ程よ遥ゝそのぐ浦二郎ぞと名告りくも左のを惜ゝうもあるすべなよ強面れ人の心やとらひつよと泣沈めぐ吉次出ぬぞ勃然とゝ出ぐまを餘うある怨言ふる縦五吾倘が吉次るぐぞ浦二郎んとそも凉も亦

聖賢の経書に諳じ天魔よ魅憑らるとも忽ぶ娭と不義せんや況浦二郎ごぼるのよ浦二郎ぞと名生呂れとらるぞろ証ることろ一旦のゆる霄ホ暮七ツ約束ある疑解の一條三百金の身價を垂捐ふせーいあん刃の親公の舊臭を雪ぐよあらぞや有右者あん刃の心の親ゆも考之他ゆも信あり此の誂を忘れのひ一枚とのみも果ぞ糸萩ハ瞋まる眉をち揚て心獄ね説ごう昔損せー財をの人の怨を解んとの武士ホ仗げる薄情二親違ふまれまくまれ三百両の舊借財ホ最借母屋へ来くるまぜ彼秋布の淫婦とりぐそろ在らせんやとく来ませと携ろ引ち涼声立くぞ果ーる愚痴ぉ凝る妙子の嫉妬の歌ょ書られー吉次ハ困ド果くぐぜん術る折ろ母ろ枕が母屋る縁頬より声高ゆふ糸萩々々と呼立れが序次ヲーと思べども了得親ゆハ勝よりも淫貞隠せ糸萩ハ糸の玄れれの恋夜ぉ甲斐る玩恨のうぞくのゆも盡ぞ恋人ぉ離亭の腰障子ホ陰より雲妾時厠窺く阿唯と一ト声応々母屋を投く生くゆく妬婦の後影ちーも目送る吉次ハ一ト息吻とつ経ろ有然程まる枕ハ女児を便室よ呼近つけそとろ散ーる縫刺の衣庁よせろ髀を進めそ喃糸萩今ばらのふ及びども浦二郎とのよ生写ーる采女ゆーを凝そ心病ーそろち腹こちぐぢひろひそやろちつけゆぐと仂るくのゆひゆぐ慎ぞ浅き女子ぞと挟せられと親ぐゆぐと胃くーくゆそろー壁言ばよりや彼人が浦二郎であらえともをを爭ゆく浦二郎ろーぞとのべ既ゆをや心変ろーー空華人るをる庁は執念深くも草叅ひのふ世ふ愚魚皆るる所仂るろぞ好も好ぬも一ど盛り久後遂ろ玩縁ーろ玩とろれろ必ひ絶のべ却よ後安ろぼべー斯のへべろ子ゆも恥ろぐゆろーぬ言るぐろろろ昔河竹の夜毎よ替る客でをろ必ふよ遺ろぐあろ玩人よあゆをを

強顏とこの山屏風のうち小夜衣鳴曉七日もヨヌクル只假染の契ぞも
人尓恨あるものを猛るをいかんや悪墻に飽まぞ肖る凝ひの処ちさてそ必ずも
その人ゝ母をいくばせん加以のぬる霄七殿の貶ゝこゝろが贖身券
書の恩義の枷を被らまく不否とのられぬ拙言言をあん男かよくも皆ぞあるねゝ
こゝろざ男をのちざまの好ゝ母故ょ今もかも子ゐ教もべ死ようるけれど老く非を
知る懺悔話説もあん男ょ心ねさせんと必ろぐ慢ょ説誘るとる。ありひのひそ
誰うへも衍あるへみろ年のころかやゝ一日の料られば親のなこ皆まてそ拯の
引の為ふねるゝ彼処の言の洩皆えょ向の浦のた者とあちんそぐ堀とのぞ
あらんゆへと憑ゝ処ようもありのゝやとろべの妻子の秋布とのまち死せりと
必ひゝ来女ぬゝの差るく。ろょ再會ちのべ浦二郎とのられがとて死せりとも
定めくゝ。あまたらのようを必ひ汲く。来女ぬゝのへゝもさく必ひ捨のへゝゝを

ゝまれりもあれ父多々く公へろゝ死孝約そやよゝ死子ぞやゝ皆ゝ死のべと
毬乳母ょ繰返されく糸萩ゞ心いなでゞろ皆の鍼のて刺るく苦さ涙ハ
泉と渠々引捉の水の湯とぞる。胸の敲の遣る瀬もるゞをゆう發く鎮め
鼻うちのみく。けよゝまでゞあぬりるぐらのかく。まそょ叮嚀ょ論のあをおん慈愛をいろ
でゞ空ょ皆ゞるらん。又心ょ向定めく後ょ応ゝゐりてん且く候せのひゞとのるよ
多枕合笑く叔へ皆ゝ早の応ハ卻ょ未遂ろゝ死りのるれべヨ哥思の
上の応を皆ろゞ父多々く公も安堵のろん。かくもぐも必ひ迫ろく散死を倍させのふ
ろと心たるを皆ろけそ生応ゝく泣ゐもく心の中ハ今宵の中ょ死んと必ひ決め
なる妙あろぞ旦尺非もるゞ。この日も既ふ黄昏時能化寺よりかゝり本居の秋
布も七衣七のたゝく母屋ょ声をろけく内室只今かゝり皆らあるゞの曳ょ皆尺の
痛むょ後ょろ徐ょ退らんとろく。ろかく町ろ後れのべど程ろくかゝらせのべと

父なる枕障子を開く出ひよろ早くも疲労のひけめ夕餉を参るもうらせん且く休ひのひと言の間よりや秋布ホの母屋を造る庭俗ひ離亭人入りよけり夕重の點燭比る枕ぐら運ぶ前火茶飯梶菜羹離亭の蕭然るうしもうち相譚声賑ーく睦ーげるる吉次夫婦を妬ーと出ふ糸萩そ絶ても絶ゑーー裏見の葛の笆間よりのーる垣やと緑頬ゟ伸上れども栽笹の冬樹の枝ゟ隔られ視目定ゑふ届くひども障子ゟ映る人の影彼へ正ーくうぶ郎と秋布ゆそあらんぞぶ尼昊ゑようふ寄添ゑく何を恨この面當ゑ噫腹さーいふせん左ても右ても死ゆ身の憎ーと出ふ彼遥姉と刺も違ゑ強面ろ出郎ゟ出ひあろんと出ひ詰る無分別准備の短刀抜ん付く潜近つく巻石俗ひ六七歩ゆく程ゟ能化寺よりやの木く背後ゟ胸へ父若二郎糸萩等と呼制もび吐嗟とだろうち驚ふくろるをやゑ

若二郎ゟ痺ゑる足を一足蹉ふ走懸ろ引戻ーく縁頬ゟ撞と推居是成無敵の何事そぶらぬる日より母ゆものせ迭身代ゟ諭ーてもぎ聴うけぬ質太ゟ魂性ようる出怨を根ゟ持ぐ今その刀物の三昧ゟ宣定ゟ沙汰の限ろう。親の意見ゟ従のぎゟ不便ろぐろうるふろけく後の患を断んのこ吉次とのふーも潔く出ひ久ゆ放秋布とのとも睦ーう容人達を慰る放応そぬゟかそも否欲然ろとゟ放ーくー覚期をせよと敦園く声も外へ憚る親の慈悲刀の柄ようを掛れども糸萩怕るく氣色ろく親の仰を用ひぬ不孝死ーく泥勉ゟへ堕ろとも出ひ断られぬこの刀の因果そを憎ーとく撃まく死ろべかくまぎぞのも出ひ敷ゟせ況ゆ親のるゟふらぐそ本望ゟ伝ーく死を究めろ妙の執念退ゟ退そく斬くのひと刀を衝若ろ項へを伸ーく死を究めろ妙の執念退ゟ退ゑ若二郎ゟふゆ及ぶと刀の鯉口既ゟ四五寸抜掛るをやよ侯のへと林ゟ

のの是則ち枕の目を泣瞳しく走り来つて情強たこの子を憎さ親のう
ち殺すめよとも一日の怒り治りく後悔しのよりあらが死したるのく復らんやよく深
念しのよりとのよう若三郎隻眼を睁らく痍を
負しるべしが衰七よ唯諾する。の一條をいっさい然ると云へ親も子も死しこの後
まで悪名を削らくと云あべらべ要をあれと懐より准備の早縄とり出したる。
糸萩が双のまを背へ捩揚捩著く。えや先々と綁て背門の此方の老松の
幹よ枉足と斃糸苗めく。嘆息しつ。をれ糸萩目今撃べき刃ふ拠るこの郷か
親の慈悲死てふ花の咲く時もる死。松の操よ恥らひく玄れし心を改めよ今宵
一夕辛抱めとせんよ枕もそろそろ泪ぐ。憐愍をる被のひそくおるえと伴ふく。
うち落しる糸萩が短刀とり揚引提く障子を破と閉れども心をちゐ二
親の。のこ残る夜寒の肆月の空の八十八夜の別霜鮮ぬ忽ひ雲間の月も庭ふ
隈ある樹下闇心の烏夜ふ迷ひ
退のける有右程よ離亭る。吉次秋布蓑七ふい糸萩が事の趣残
すぞ既ふ定うよ洩ざくりふまぐ死と相譚ふ蓑七声を潜しと執念深く凝る
女子の愚痴。今ぢらふせん綯ま。然るをこ尽虚々とろく逗留しのぐれ災禍を
俟ふ庶幾ど彼大功ふ細謹を顧ず大礼ふい小譲を弊せざとろふ古語あるべ
あらず夫婦よ生ざしとく立退せのくしとの又秋布も豫て夜話も生ひ死。
ころふ主後を拯る彼無名氏のいるとあらん刃同胞の妻さるの一箇ふ栄一箇ふ
枯んこ稔の後よ乾坤九ふ會んとのひも今慈ふ當れど何処も知ざ信
ざど現廿衰七が諫ふ愛ず旅行の准備ふ暇るりけり然ば又糸萩ふ更ふく庭の樹下まその刃を斬糸苗ら
よとそ准備ふ暇るりけり然ば又糸萩ふ更ふく庭の樹下まその刃を斬糸苗ら
まく且親さよ恨めしと学迷ひ邪魔人畜ニ悪道の苦さをこの世ら

天の山劍の林ハ松の鍼引ハ夜露の霏々と勘る歎ハ誰ガ所爲ぞみる秋
布ゴ所幼きまゝ釋ども釋ぬ緒の索さへ延ぬ短夜の時るをまぢ死ぬるとも怨ら
竟ハ彼人々を執も殺さゞ已ゞ放とそ跳揚々々狂ハ狂ハ心猿意馬の尾筒ハ
似る乱髪顔ハ被れど両の乳ハ現開花ハ蜻巣ハけ一風情ハく亦
潛然とうち泣つ涙ハ濡らまし夏草の末の露欤本の露落をゞゐ谷川の
岩ハ摧る心地ハ裏く胸そ焦る瀬ゐ然程ハ吉次夫婦蓑七ホハ行装を
整て出んとまるハ奥庭る糸萩ハ緒られるゐとを過らゞゆく路るけれゞ姑立を
聞一面を背けて走ゐ母屋を遠ゐつ辛ゝく外面る諸折戸を密と推開て
往方も定めず立出を糸萩ハ佶とそ噫朽を後妻ゞ郎を誘ひ出ゐう逃るとそ
逃えゐ返せ戻せと呼びけそ追すくまれゞハ緒の索ハ忽地引止られて臀居ハ轅
びつ又起つく回とるく氣を悶く果ハ地上ハ轉輾びつ泣より外ハるけり有右又

吉次夫婦主従ハ根塚ゞ宿所を潛ひ
一徑路を過んとまる程ハ必ゞも鈎索ハ被倒されて三人齊一忽地撞と轅
びれゞ埋伏一けん暴雄ホ十名ゞつ顕れ出く犇々と緒ハ縁く准備の長
韓梶へ吉次秋布蓑ヒホを一人別ハうち容れて造化精妙と細々言ひつ
糸萩ハ吉次秋布ホゞ出くゐつ送恨ハ堪ざれゞ稍息を吻と内ゐ起ゝて
噫朽惜や腹さゝ郎を宿畧一遙婦をつく萬まも緒の索ハ自由を泛
ばれゞ一念凝ゐ虎と見く石ハ立矢もあるものをゝや鐵の鏃るとも念力残
の断ゞ断ゞえ況これらの麻索をやハゞふまゞ
逆彼方の緑頬の下ハ雀啣ゐ草苅鎌のあり一をゐ取くゝ上ゝ噫欤や
よゝ物あり然れども間遠くゝ足も届ゐぞ多ハ悋ゞ世ホ早蝿成昇神ゑとも

たきつら
若二郎

糸萩が執念よく利鎌を働しむ

つくづくを憐れのものあるべく彼鎌をとり寄らーそこの索断せのくらー憎ーと叱ふ
淫婦を追掛く怨を復さん一心非情の物ゆもあれつゞ念力を現さんな湯立の
釜の自然と鳴ると風信の車のあづら輪まる如くあの鎌の歩くあるく又寄ざらんも
疾とれ利鎌寄せと一とさゝゞら人なのゝ如く疾視詰る目も瞋ゞと乳を暢する
執著の心火忽然と燃出く閃光飛で利鎌のほとゝ落るとあるべ怪ーむべー
鎌ハ倏忽地上を離るゝ閃々とーくく糸萩の身追へ来るとある程よ絆の
索水も溜らぬ矢庭よ弗と断捨うと吁嗟ーやと糸萩ハをと働ーく掻合る
鎌の柄を握く外面へ出る背後よ若二女の執念尚れやっと唸ふ
声を耳ゆもうけぬ糸萩を己も遣らじとと追蒐うと畢竟吉次主従暴雄ホよ
捕られ糸萩亦これを追ゞ甚麻合る話説ふあるこゝ次の巻よ解分るを聴ひらー。

松浦佐用媛石魂録後集巻之六　終

松浦佐用媛石魂録後集巻之七

東都　曲亭主人編次

第廿二回

乾坤丸中よ亦復親族を聚ふ

案了前駒再説前探題経高ハ迹を暗ーく影を隠ーく三稔追捕を
免るゝ縁由を原ふ曩よ経高孤城よ籠るく鎌倉の追討使実政の
大軍よ捕囲さるゝ城中の脱穴より士卒と共よ落亡せよ頻切よ股
肱の老黨退蚊ノ平次将純ゟ主を棄く往方を知ら在を況その餘の軍
兵ゟ衆四落八散よるゟ果く身よ随ふのとそ浮箕伊加太郎檜垣轉
馬と呼れる只両箇の若黨のミ左右ゟ扈後ゟうける現落人の沿習とそ天よ
跼ゟ地よ踏ゟく杣木樵る山の賤婦ゟ一碗の糧を乞ひ細曳ゟる浦の蜑戸ゟ
半夕の宿を討んと欲ゟふ人衆逆徒の残兵ゟらんと必べられを憐ゟゞ壮佼

笘を驅催しく捕捕んとするに辛くその所を立去りく松浦る今
福の浦を過るとき日は甘春れど宿もる家主從いく餓疲もそのどせん術もつけ
登時経高の磯石よ尻を拭く伊加太轉馬を召近つけやくも武運よ竭て身の
倘浦人よ生拘られて矢田の陣所へ牽れる恥のうへの又恥ふされゆゑ腹を切らん
汝ホコろ奴錯しく首を海へ沈めよしあろろる旅と操返を覺期の遺言雄々
しげ鎧を脱ぎく坐を占るとも林のやうと今更よ心後もく密音よ念佛
高ぞおろけるにれが又伊加太轉馬の両人が千百人ホ提れる誠忠の心りくホ
まぞ後ひ本るよあらぞ折もよろ経高を擊て実改よ降参せんそのゆの事き
ぎみづら腰ホ著られる金を奪ぞ逐電もぞと示合せの共れ今経
高が自殺の覺期を已が利とく竊ホ欲び支稍成ぬと思ぐもちろ氣な紀
面色しそ両人齊一跪たつくとうち泣て共倡ホ荅るもう千軍万馬よ將る
お身も武運ホ竭さそのひゆるん覺期よ痛ちけれ御先途をそんろよ見ま
ん供仕くいへども大厦の傾んとするよ一木の支ゑぞよもぐぞお自害ゆぐお
頸をものつく石を附て海中よ推沈め某ま共倡ホ底の水屑とうんの切てホ
本意よホろくと荅るもぞ経高遂ホ已ぞ及ぶと短刀を抜てうち含
直しく腹を切らんとする程よそよ等のと呼禁めく十七八る美少年崩慈威の
身甲ホ亀甲形る脇甲臏脊しそ紫赤銅造の両刀を跨へ皂蛇皮拷の小袖を
衣る磯馴松の邊よ忽然とく顕歩を主從駭怪さく其方を齊一とくり
たゝ誰やとろろ問うけど尚ホともろろしーをゆ少年なもあそと経高ホうち對ひそ縁故を
知召ぶ御不審ホ理ろ甘ホる牛渕九郎清縄が兵法の弟子ゑ姚呂歌二郎得
時と呼れのゑ曩裏ホ清縄ホ従く飛蘭渡の些名を戒ぢひよ清縄ホ戦没しそ
紫を東軍よ攻潰され篭る所の三百餘騎或ホ殺され或ホ落亡既ホ資を失ふ

あるう某残兵を招集めそゆえびに飛蘭渡の些石を執建いそで曾経旨の恥を雪んと
栄ゆ甲斐ある君の没落寓方の城を落されぬひく行方知れざるよう世の風声よ
く隠れおければ環舎なりそ犬馬の力を尽さんと思ひ一孤忠の空しかりけり見参入の
一報びに何ぞ教れよ優宅を准備へんへ御心安く思召れよ自
教を急せぬうんへ物体るくそれとなく経高又驚きて且報びて刃を斂め原来和
殿ん清縄が兵法の弟子なり一教隊てその姓名ざも偽り伎るるもうたを知らず心を
用ひられん清縄あら蘇生ってこれを資る心地ぞする扨も和殿の准備せ隠宅へ
何処ぞやと問へ歌二郎声を密めてさいん西九个國ん總く敵地ぬなりそれべようや
深山の奥なりとも陸地のあん住ひらるん危しと大笑ひる船を八九
艘造浮めそ連環しく繋ぎ合せるべ九艘ぞれども一艘よ異ならべその船ん一艘毎ぬ
長サ二十餘間あり一これを九艘合一これが百八九十間の大船之船中ん置とろ兵士卒
三百餘人あり又兵粮も充分なりべ且船の中よ菜園あり日毎よ猟船をあろ一浮めそ漁
猟を支とるとえ庖厨ん物をかくとるー君とこの船ぬまー海さえ東西南北風よ任一く
到らざる処なく出没不測の大利あり進ん九个國の港々を討暑ふく退ぞその孤嶋よ歇
まり討ん官兵を防ぐべ倘その志を遂ぎ微ゆえ成一くべ船よ生涯を送る
とも誰ぞよくこれを知るべ是洋中の別世界究竟の隠宅これが則その船を命けそ乾
坤丸と呼做一ん誘ぬあん迎の三板船浦辺遥かあらざるよひうけなん誠
の経高ぬ顧慰漠ぎそ恥ぢ額ぬ加えるるを釋て貌を改めそ折れ勢ひ究ぞそ落
人とえりーよん恩顧の者ぬ乗られそうぶ仇ぬ世ぬもよひきやぬほの
資のあらんとえ清縄が弟子ぶる縁を忘れぞ義よ仗るとも年ぬとうえ労めあるを
ばくぐどえ大義の計畧感ぎるふ急ぎ餘せあり既ぬ准備せられをのぞの推辞
べぞやよ転馬も伊加太郎も歌二郎よ對面一そ欽びを述ぶあとのれそ両人進と

出て名告をして主に連て身の幸ひを欽びつ。登時歌二郎は澳の方にうち向ひて。叫子の笛を吹鳴らせバ忽然として両三箇の雑兵快船を漕走らして浪打際に著けしかバ歌二郎これを見て則経高主従を扶けて船に乗移らしてその身も共に乗る程に雑兵等は艪を推進めて漕ぐこと幾里なるを知らず既にして乾坤丸のほとりに船を寄せしかバ歌二郎は又経高主従を件の大船に請乗して艫に三板船を引揚けり。当下経高主従は首を回してこの大船の光景を見るに二十間に余れる船を九艘繋合したれバ総て六百八九十間あり。裡面に楼閣を作做る奇麗壮観のみならずもありし。この余書斎あり便室子舎耳房あり局の内なる前栽には花紅葉のいろくなるを栽並べ菜園の畝毎に寒暑の時に従て百の種子を時做る異木芳草の美しき枚挙るに遑あらず且弓箭刀戟のいとよくなる衣裳調度に至るまで満足らずといふことなけれバ波底にありといふ龍宮城にあらずハ水仙人の聚といふ貝闕玉洞ならん歟と疑惑ふ可るて目を驚さずといふことなし。有此而姚口歌二郎は上座なる裀の上に経高を請登して船中に在る宗徒の士卒を悉見参させて且嬋娟なる美女十人その左右に侍らして祝寿の盃を薦め饗食饌大かたならざれバ経高歓喜雀躍して望足ぬと思ひけり勢ひかくの如くなれバ櫓目転馬浮箕貫伊加太郎等は忽地野心を転して主に従ふ故の如く且歌二郎に媚諛ひて酒肉の余瀝を貪りて光陰をおくり送りけり。然程に姚口歌二郎は乾坤丸の連環船を一所に歇置ず遠きは千里二千里近しといへども百里三百里陸を距て海に浮みて進退出没世の人の知ることを要せざりまく月暗く風波静なりし夜は肥前の九艘見崎に船を近つけ或は江浦東嶋若松西嶋。奈留兵庫得仙白石佐井宮岡栄螺赤嶋に船歇りて暁方になる毎に船を遠く退けて浦曲に親しむことなけれバ九ケ国の武士守護人も定かにこれを知るものなし。およそ鎌倉より追討の沙汰もなく既にして三稔を歴ぬるうちにはやの歳月を

空を送らげるの歌二郎只一人のみ鎌倉の風俗を拵へ知らんものと東へ赴くとぞもあり
或ハ智勇抜れる郷士浮浪人を相談て身方にせんと折々南北の旅宿へ
或ハ三个月或ハ半年他郷まわり経高主従の歌二郎ハのみ悼ミ涙が船中に在る
とぞ酒宴遊興稀なれどもその他郷まわりと云ハ酒ハ飲ミ色を好ミ管絃のみに絶
る階なく酒池肉林の宴楽に驕奢を極めて逆謀を支度せんハ生涯のくわんの如くあるまじきハ
ミ王侯ゆも優ミ限りなき齢を心利る雑兵を彼此へ遣ハし不死の薬を討ると頻りに不題鼠川加二郎
武行の暴悪ハ相模る動の磯ゆく瀬川采女吉次を狙撃ハんと云身方の両人長城
野兵太と奴隷貫九郎ハ必死の深痍ハ仆きてかゝるハ悪ハ
処を立去らく摂津の兵庫ハ船ミ居ると鎌倉執権の下知として逆賊経高ハ
在処を知らく撃ハ捕て進らするハ縦大罪ある共ともその罪を赦免して賞禄を賜る
べしと徇られを加二郎ハ聞ハて肚裏よりうれしく思ひつゝ鎌倉を追拂れ
更ニ又怨ある瀬川吉次を撃ハ果せんハ左ても右ても陰霊ハ今ハ這囲の下知ハよりて
彼経高を撃ハ捕らんハ易の罪を免されて本領安堵疑ひなき又運の向ふ森嗣ハ
西囲へ赴ハ経高を索んものと尋思つゝその年の夏の比より筑紫へ到りしきく経
高ハ在所を捜索めハかども一毫も便宜をハさゝる程ハ盤纏竭ハてせん術なく
なりけれバその次の年の春の比より肥前国松浦郡九艘見崎ハ漂泊ハく猟船を乗
習ひ漁猟をして世を渡る程ハ今茲春三月の下澣ハ細ハ一口の大刀を獲ハ
柄を解放ちハ大刀の銘をハるハ不死不死の四字と鐫著ハ登時加二郎ハ
不死不死九の名刀ハ瀬川采女が先祖相伝の重宝ハ長サハ一尺六寸ハ吉次常ハ
副佩ハく身を放さゞるようを豫ハ仿ハるハこの刀ハそもあらんぞとハかれバ吉次ハ亡骸の
異様波ハらまゝとハの名刀も海ハ沈ハ

售るなれバ。その随に價を論ずべし。よき物獲なんと欲びて件の刀を携へ日々に巷に立出ぞ。
人の過るを見る毎に声高やかに呼ハるやうハ。おれに一口の名刀あり。此ハ是唐山なる後漢の仙
人鍾離權がそだちし。俗に在りしとき異人よりおほく伝授せられし。青龍の剣即これなり。我
朝にハ文治年間常陸坊海尊これを夢想に感得して不老不死丸と名づけ
なる異國伝来の霊剣なり。人これを帯るときハ。魔を降し禍を禳ひ富貴その身に
餘りあまつさへ。壽命ハ天地と等しかるべし。刃ハ何も換ざる宝なれども。その徳なき身の相応し
からねバ沽却なさんと思ふなり。誰でも千両の金をそへて。この名刀を買んや。ないかいかと誇
り良に終日声を嗄らせども人僉狂人なりとして笑ひけるのみなりけり。有此程に彼経高が
指揮によりて不老の術不死の薬を討ん為に扁舟を九艘見崎の磯邊に著て彼
此を徘徊しる。乾坤丸の雑兵両三名。今加二郎が云云と呼ハるを。ちらと見てまたしも
誇るに加二郎ハなかなか説諭ると前の如し。雑兵歓び領て。わが主君ハこの月ごろ。

不老の術不死の薬を求めのよる頻りなるに。その刀ハ奇特ありて汝がのぞむまゝなる價を
論ぜず買せ給ハん。誘共侶に來よといふに加二郎も亦歓びて伴れてゆく程に士
卒ハ件の扁舟に加二郎をうち乗して何処ともなく漕去るに加二郎ハ訝りて。
なべく宿所を詰るに雑兵ばらハよくも答ず。汝只今向ずとも彼処へ参らバおのづから知
らん。わが主君ハ京家にあらず又鎌倉へも従ひ給ハず天地の間に獨立して富大洋を
有ちたまへバ。さまざまの物何かあらんぞや。こゝろにまかす稱せなバ價ハ汝が随意なるべし。然る程
沾むところと言語ひとしく窘めて頻りに觴をぞ操りける。この時乾坤丸の連環船ハ。
九艘見崎を相距ること五六十里の澳中にあり。九艘見ハ原九蒼海の件の九
艘の連環船。この出崎よりてある日の餘の浦々より見えけれバ。九蒼海を改て九艘
見といふなるべし。閑話休題姥口歌二郎得時ハ。この春二月の比よりして乾坤丸の船
中にありけれバ病著のよしつたへて閉籠てそのミありしかバ経高これを幸ひにおもふ。

忌憚る所なくこの日も乱酒に酩酊して歌舞する侍児共にうち雑ぶ主に諂ふ浮
簀伊加太檜垣轉馬は左右に在り紂を資る崇侯の時を得見に高笑ひて
倶に奥をぞ催しける浩処に肥前の松浦へ赴たる雑兵両三名鼠川加二郎を
将くかへり来つ僉共侶に跪く階下に声をぬり立て恐れながら中上げんと呼ぶるぞ
伊加太轉馬はこれを見てそれ何るぞ疾まうせといふ一人進みよりて某ホ仰に従ひ
連日港口々々をうち巡りて不老の術不死の薬を討ぬれひしに今日九艘見崎
なる街頭に立て一口の刀を携價一千金に售んといふものあり即便縁故を諮ひしに
件の刀は不老不死丸と名けたる仙傳の天宝之これ刀を帯ると云ひ富貴その身に餘り
ありて壽命限りなしとなり是によりて件の男を召従へてゆえといふを経高うち惜く
そいひと愛ふ名刀之傳来正しき徴やあると問れて加二郎かそなく進み出額を春て携
来る件の刀をとり揚く膝に推立抑この不老不死丸の名刀は後漢の仙人鍾離

權が青龍の劍即是我朝文治の年間に至て常陸坊海尊夢想に
これを感得たく仙術を得て老ぞ死なぞ今ぞ陸奥の山中に在り某が先祖は
海ぞる仙人に俗縁ありしをもてこの名刀を相傳せり今ぞ某薄命にてこの刀を帯
るに相応しからぞ徳ある人に賣与るべ還て便著をぬべしといふ示現を蒙てゆへ一千
金の價を求めて賣ばやと出ひて日毎に街頭に立在てその人を俟ふれども
望を遂ざりしに賢君の御内人この刀をもて参ゆて售なまといれば洪波を犯て
参上せりこが為の大財主願ふは先よく商して買取らせぬかしと實事しやうに説
誇ゆて刀を高くさしよまれば伊加太郎おろゆて執次ぐ刀を経高はなをら受取り
抜たるちく鍔下より刀尖すぐ熟うちみてうち微笑ひ仙傳授与の来歴は定か
ならぬるなれども名刀に疑ひなし不老不死の銘に愛く價は望に任せべし必ずに汝は
生れながらの漢者ゆゑあるべからぞ慝まぞ告よいかにぞやと問ひて加二郎此も擬議

せざ賢察の如く某は鎌倉の執權北條時宗に仕へて鼠川加二郎武行と呼ばしめて朋輩の讒言を釋ん為に對決を請まうせしに時宗見て眉の沙汰をもて某を追放せり。この怨に堪へられば件の讒者瀬川采女吉次といふものを動の磯にて殺す果して遠く肥の州に蹤を隱せし浮浪三稔に及ぶをもて盤纏竭てせん術なければ漁翁に身を寓して網引をもて生活とし居たる已にをはざるのみ世に賢君良將ありて用ひらるゝものゆゑ死をもて仕へまつらんと豫てより思ひ込むと憚ある言なから鄕に某御内人にこの刀を求めるに主の宿所を問ひしに吾主君は京家にあらず又鎌倉にも從ひ給ひ富大洋を有ちなんといへれしかしてあらざるにけれ尓らば君は東海の龍王にもやをらせらんあれ何処にゆゑと問へば経高うち笑ひて汝が疑ひさもあるべし今その素生を諦せしを皆くに舊主時宗に罪をなせ讒者瀬川吉次を殺す果し亡命をなるものとしいへば己がう人慝まで説示さんこれは北條一家の大

姓筑紫の探題経高さんを害せし時宗が非道の行をなるに忍びぬ大義の旗を揚しかど勢ひ微にして事成らず寓方の城を退て去て年来この船中にあり残兵を招て集めて九州を討畧らんと思ひつゝかくまでにこゝに安樂に光陰を送るは牛渊九郎が弟子なりし姥口歌二郎得時が忠義の資に依るのからこゝに身天授の洪福なるが今又あなたに至らんや歌二郎は三稔以来折々諸國を巡歴してをさく身方を招けども。いまだ智勇の良士をなすに今なるに汝はこゝに愛臣牛渊九郎清縄が讐敵瀬川采女を殺すしと欲せば欲べく賞すべし。けによりて吾に仕へよ軍功あらば重く用ひん。汝が心いかにぞやと再問れて加二郎は肚裏に思ふ。これは兵庫に在りし比より這経高を殺す捕て鎌倉へ帰参せんと思ひにけれど在処知ましば空に三稔を過せしに今圖らずしく経高が隠宅にあるを寔にあらざる幸ひ渠身のよるべなくなりて船に住ひ水に漂ひ此一の安樂に誇るともいかなりの事やはある且くあれに足を駐めて。

折を覗ひ轂を捕るべし。経高をごに結果るべ。餘の奴原は怕るに足らず。吁あるべと立
地に分別しつ。莞爾と笑ひてむかし。齊國の孫臏は片足痺てゐへども。智謀は後の
世まぐ軍師なり。我朝なる鎌倉權五郎景政は矢傷に隻目を失ひしかども。萬
夫無當の勇士とある人のいひ出れば。君も某が尫弱不具なるを嫌はせ給ひぐ。
召使んと仰せるにこの身の幸ひ何ゆ欲これに優ぐれ。いかで犬馬の力を盡しく。時
宗を討滅せ。計議を旋らしめん。既に主従なるうへは見参の牽出物にその名刀は
そが侭に受収めさせ給へかし。價を望ゆはぜ。とひ瞞せる佞辨を経高疑ふ氣色も
なく。然らば鼠川加二郎に両刀衣裳を取らせよと声高なるに呼れば遠侍なる近
習の壯佼美りぬと応へ。大小の刀二口と小袖袴をとり具ひて長蓋にうち載せ
しを。ちや両人してのて来にければ加二郎これを受戴おそ恩を拜し退れて。件の衣
裳を被てりける。登時経高は加二郎をねぐ来る。雑兵ホを労へば皆額をつれ痿

痺を捺りて。武者屯へ退く程に加二郎は衣裳を更め中刀を腰に帯て又経高に
見参せ経高これを召登して主従不鵜の盃を取らせんとする程に矮屏の陰より
しく。吾君霎時等せ給へと禁めて顕れ出るものあり。経高主従放馬にて齊一其
方をうかゝれば是則別人ならば姥口歌二郎得時に病後の衣裳華なる腰刀をとり
退け主に對ひて礼儀正しく恙なるを祝しける。辨舌人柄重くれて席上の盃盤を苦
苦しげにうちかたる。氣色に憚る檜垣轉馬浮箕伊加太は身を縮して序次なる
しと思ふのこ。歌儛に侍りし侍児ホに誰分付ねど盃盤をまゐく取て身を起しへ。
逃るが如く退れけり。そが中に経高は酒噯して貌を改めおそ珎らし歌二郎。鄉高ホに
所労あるよしにて久しく對面せざりしに。思ひかけなる猛の出仕は病著既に痊りし欤。
火急の要譚ある故欤と問へば歌二郎膝を進めてさらば賤恙全く痊らるゝ中上
なるよしあれば推て只今出仕せり君は大義を外にして日毎の酒宴遊興に女子

小人を近つけず樂く思召す旅苐新の巣造るし鳥の薪燃て巣を焼くを知ざるが如く危と危し某彼処の人ひく鼠川加二郎が進らせる不老不死丸の僞未も渠を家臣よりこれよりも洩ざく毎ゝ疑ひ給ふるを信られね。

扨この義を笞員ゆんとのひそ加二郎よりも對ひて武行近く進み和殿の名刀ハ後漢の仙人鍾離權が青龍の劍ぞりを海るが感得せとのまゝを信られね。其曽才子傳列仙傳ゝ據て考るゑ鍾離權字ハ叔道和谷子又王陽子と號ー又雲房先生と稱ーうこの人漢帝の命を受て吐蕃の羌胡を征伐せ玉ふ時利を失ひて山谷ゑ走り入りく異人ゑ遭ふく仙術と青龍劍の法をゆうめれが青龍劍の名目ハ只一ト腰を指てゆ劍の名あめるぐ壁言が彼僞燈録ゑ活人劍殺人劍の名目ある如く青龍劍ハ仙傳の法術の名るゑ縦然る劍ありとその今ゑる所ハ打刀ゑ劍り總く両刃わく辟邪斫るを利と

まれバ便和名をつるぞと公うけゑ和殿が携さる不老不死丸ハ片刃ゑこれを刀ふと和名ぜハ即片刃とゆ義るうこの差ハいかゆと註記られても加二郎ハ此も怯ず某文字ゑ疎けれが青龍劍ハ仙方の名るゑ不已をゑうねども初ハ劍ぞりけんを海尊これを感得そ鍛更めそ刀ふあさる故これも亦知るべらぐそハまれかくもあまこれ刀劍の利とまる所ハ堅ゑを砂るを宝とゐ其くハ不死丸の利鈍を錐ーゑよゑ藤身の軀ぞりとも豆腐を切るより易るべー旦又仙僞の徴よそとゆよ歌二郎頷なくとの完丸竟の物ぞあれ某新刀を錐さんとそ雑兵ホよ分付く世ホよるべる死乞食悲人をねく来ゑよく遣せよ長門州大津郡阿川のあねさるゐ向とゆふ出崎ゑく一箇の癩人を捕へ来れそ其病中るゑそそぐ俗雑兵ホよ預置ゆゑこの汁をのそ錐さべー五吾君も御覧ぜよとのひつ外面ぞうち向ひく者共やあ。預置る向の癩人を牽出せそくせよと呼立まハ豫く准備をゐうけん兼り

歌二郎

伊加太
若二郎

ゆと応ふる雑兵二名庭門より立歩く病腫する一箇の癩人なり。索を被け引揚ぐる縁頬近く推居けり経高を首とく会釈しとく眉を顰め噫無慙や腫張する全身の蝦蟆の背の如きを宛ら怪有の病人も世あれがるるのみそ嘔しのやまを歌二郎ぞくりて人々さの三嫌ひまする渠ハ全身腫張く歩行素より不自由ゝ耳聰けれどものの如ぎ只の真言を唱るのみ尋常の人ゝ比べ両三人の肥肉り緋物ゆ究竟の武行件の力をの者を緋もや不ゝと向れて加二郎欺ぎそを御家老の指揮ぞれどる仙洞非常の名刀のくまで腌臜ゝ癩人を砍らべ冥罰も亦揃りゆて。その我ハ許さぬひと推辞むを歌二郎うち笑ひく然らばこの癩人の外ゝ有ゝ緋さまぎ死物ヨりろ者共ゝ秋布を牽出さぬやと呼ぶを一箇の雑兵何と廿合て捕縄被ー秋布を又庭門より牽寄れば。

癩人の縄合る雑兵ゝを傍の退け立替るを秋布あぐんでそ彼いぬる日向の崎ゆくゝ失ひるゝ者ゝ肩まや彼人も摘拘られてこの舩中ゝ牽れおけるとぶらどもと問ひ難て噴息の外ゝ言甚おもるゆくと両ゝ窒妥く桜ゞ枝よかる納縛の甚鳥蔓牽居られつゆるを加二郎いたぐとんでく吐唾とうち驟ぐ勾月を鎮めそ歩とも出ひうち目成ゝ秋布も亦目を尽加二郎ゝとそければ憤然とく怨ふる堪ぎ立まくまれば雑兵が動ぎそと縄令を詩くゆびび撲地と推居ぐり当下歌二郎ハ経高ゝち對ひく五号君あの女を亦肉せよ渠ハ清縄ゞ雌言敵瀬川吉次ゞ妻秋布ゝまゝよハ鼠川加二郎ハ秋布ゞ親博ヨヌ弥四郎ゝ素ゞ処の仇ゐゐ在処を索巡りつ伊万里の荘ゝ到著せ甚ゝ捜知く昨宵雑兵ゞを彼処へ遣ーその所親三四名と共ゐよ生拘ろ緋物ゞハ相応ー処女ゞそ立とよ経高頸を鶴ー眼を斜ゆーて餘念ろく見蕩ろて平胸ぐり出ぐる太息を吻て

瀬川吉次が妻秋布ハ儔稀なる美人なり。と年来偕老なるが忽ちまして妖艶なる
骨細く肉柔かに美女をそ錐もて鉋刀をも必斫るべき渠志を傾けてうれば後ろの
ろべ壁妾ゆく親く使ん秋布と共侶よ生拘りくる若者あらばを牽出て錐させよ
彼を殺さん惜しからずやとハ歌二郎合笑く如右思召るゝが吉次をそ錐さまべく
とハよ秋布驚なく佐と向上ふる怨の目尻あよ初く歌二郎と面を對へ赤驚
ふくあり匂ハ曇よ偏哲菴ゆくつとハが必死を救ひ彼を名氏ふあくびやと問まく
まるを歌二郎ハ耳ゆも被けず声を苛立この女子が押々ゝけよ問ぜくうをまるとろを叱
懲そ恭く又経高ふうち對ひく五吾君鼠川加二郎が食言まる信ゆ渠ハ
瀬川吉次を動の磯ゆく斃す果せよと正げふまうせども吉次ハ多分死なだその後僕
関葺七ホ共侶よ伊万里の御士根塚若二郎許寄宿せを某既よ生拘うり
とハを加二郎実吉又とせだ遽く進と對ゝくその宣りまうとゝるれども彼吉次ゝ某が

斃す果せよ相違ゆ生拘られハ別人ゆんとゆまでハ歌二郎ハ艶然とうち笑
ひく武行今ゆうゆ争ふ敢部語ふの論より證据者共ゆ番く吉次ふまうゝ又牽け
と呼る声雑兵殺応く捕索被け吉次を先ふ妾ゝ関葺七と若二郎と
ゆ枕を珠数斃ふゝと追立ゝ秋布と推並べく縁頬近く牽居れば加二郎ハ吉
次を殺ゆ駄怪そ又ふよりもうりけり歌二郎ハさもそと又経高ふうち對ひく吾
君彼ホを御贔負せよ年ゐ程ふ於ハ吉次ふ次ゐ男女二人ハ
瀬川浦二郎が結髪の妻ふ於ハ二親ゐ根塚若二郎とゐ枕そこの夫婦をその
女児ふ於を追留んとそ旗津の浦よ来ゐうを雑兵ホよ摘拘ゝ吉次夫婦主
従と共侶よ牽ゐそ来ゐハ昨宵夜半のゐれば今ぞ知召れ如ゐ尼鼠川加
二郎が斃すとハふ吉次ふ次の弟浦二郎ゝ兄の尼ホ代ゝを加二郎ハ知召
ゐべくそをれかくもあれ吉次ハ清縄が雖言敵ホ必ずゆ三ゝ死智勇の武士ゝ

鎌倉執宮の時三弦の胡琴ありしを世の老あれど植武の御宝と胡人一弦の琴をもとめ来りし類ならん

れ梁を身方ふるまと云へ大利あらんと思ふより某さるべき辞を盡して説勧めども終に聞引いざまのべ計ひ給へんと向へば経高沈吟して現吉次を身方ふるさば萬卒を得るに優べし然れば秋布と菅七と若二郎を枕ぶ縛の索我雲安時實にく吉次を主貫さるべき志を改めくつぶ忠臣とるなら秋布を返し與へく菅七若二郎ホをも親く使んの一又この誅を兼引き彼名刀のく吉次が軀を錐をのこるまで苦めせんぬれば菅七と若二郎ホ皆殺しと秋布ちが側室とくつ吉次を敵ぶ吉次を敵懲さよ又秋布ちくつ吉次を張詰る我慢を琴の調子ホ和らげ又二枝の笛をもと歌ぶ苦痛ふ筑紫琴を枕ふ三弦の胡琴をふるまと菅七若二郎ホ共に枕ふ立日曲にあくめ堪ぎ七いぐぶ経高秋布菅七若二郎夫婦のら共もつぶ命ホ背らぶ先吉次を殺しく勢ひを示ぎべし斬人ハ則鼠川加二郎雑兵ホからち曲ふをきく

非常を聚言めふと送る隈ふく下知されべ歌二郎ハ一説ホ及ぶ吉次夫婦主従と若二郎を枕ふ主命を具ふ給へく雑兵ホふろ四人の索を解をれば経高ハ秋布を理ふく側ふ召登ふべふくつ琴を與へよとのそぐ立る性急ふ伊加太轉馬ハ阿と応ぐ歌女ホが片よみ置ふる筑紫琴と三弦の胡琴を秋布と枕ぶ膝のほとりよ推ふえく雑兵ホが携ふる笛を合ふく菅七と若二郎ふ遞與んべふく青さと催促ぎ然程ふる秋布ハ親の寃家と面り膝を對ふ海賊の心尉む筑紫琴胴のあらべの苦しきハ撰盡されぬ十あまり三の緒よりふる膚脆ふりぐ良人の命根をとりそめんと思ふべくも怨の涙最逼く細ふく指ふ假爪のあふ欲ふの反ふら波の音のふ高ふ船廂菅海愛河の浮世の中ふ修羅の鼓ふうとも夢ともつかぬ枕がおふで歎ふ子をおふ人膝ふ二筋の糸萩の往方甚麼と問ふよりもるく音ハ澳の小夜鳥心あらぬ生死の海より深ふのふひ袖ホ雨漏ふ

薄衣も推辞がたき一期の浮沈浪の艖ちの命を若二郎さへ呵責の役よ不合といふれど共、侶さ咎をも為取らざらん何処を敵んとてのあれ甘の身ぞ這厚ふべやと形ち死世を憤る四人のさろ岳所の羊丸死をぞ候つ。観念の外さろ時を移れと経高が焦燥隨さ呼續の濱さなく波風の彼方是方へ立騒ぐ加二郎轉馬伊加太郎罵促を外面の雑兵大約二三十名。稲麻の如くさち囲さ弓笞前短槍を推乃て諸声合と閙たる絆の勢ひ今さま。免れさ田ふ集ふ鴟雀ふ似たる琴柱を彼此と直と駈く擾将を慮外や浮世の秋布が調子さ做ふる枕も三絃雫妄時試くも涙さ吉ふ歩ゆ乾涸の船と生く。隠も汀渚の蘆の節博士歌二郎の懐より笛とり出ひよと漂々と吹ぞ合ふ管絃の三箇の音色さ餘念ふれ経高の側さ近せ一盃を又と揚て轉馬さ酌を執らん。詞の曲子を有やと良なる息歩さ息五韻愛たる秋布とふべ合ふる枕も音を資けて詞を聴けば『おのれの筆に任せ文字の関眺ふる間の関の戸も有さ国の強顔さをふる山岩越さ浪まさら』と詞ひけよと泣く妻を尻くる吉次ふふぞも嗟嘆して命運薄く囹圄の為さ擄とふり存命べくもあら夜の枚さともあんさと思ふ妻子の愚さよ志士ふ溝壑さ経ることを辞ざ。勇士ふ元さ喪ふことを忘れざとて死ぬくのを冠屨処さ異なるとも是豈賊さ後んや。さく殺せ経高。とふを甘衰せ推林示めそなふ不覚さ世話さふる者さ棒敵物体さ一忍びさを忍びざみづさ破るの悔あん権く追ホが甘んぜざるをぬと諫さぞ若二郎も亦声を潜めて関氏の言究めて理あり。枯蒿さ登さぞ朽木ふ花任ずる元旦さ大丈夫とふはくのさと諫めて答を振揚れども打ねばそあれ雑兵ホが

さろぞ然るをみづさ死を与忍ぐふ大男さあらざー美里の阨も糎る日あり身さ天命さそく歟と罵嘻畫くさふ歟せどとく秋布が又詞ひ續ぐ声妙さ『よせその返ひ

磯千鳥（以下又秋枕合奏・なく後を人かきゝ咎る）

舟の蜑の栲縄くりかへの長恨らるゝを誰か解らん』詞ひも思ひぞ侘て琴を抱

なく泣沈め経高怒る声高く立くる今秋布等が謡よを忘るゝ皆是夫婦の

情義めく只その良人の縲紲を解まく欲する辞のこゝろ又哀七

と若二郎が吉次をよるも歐るゆふの吉次が自若として兼伏の気色るそ

奇怪るれ二人倶に牽出して首を刎よと敦圀が加二郎めうと歎びく御詫

宥さ感佩せう彼名刀をめりく某錐ーいんとらひて躯く立んとせを歌二郎推

禁めく且経高を諫るもう吉次を呵責の夕の御意を沿そ御意よ任若執

ぬとた彼ホが為体を怒らせめ理うれも彼ホが義士と自ら死勢ひをめく

逼るとゝいふまゝく死を楽ミそ尊寸命よ後ぶべ九石のゴとふとも昊を張る

ニ強ければ折れくゴの西安をるさぎ緩めそ後よ張るとゝ本末狂ひぞ折るゝるー。

然れば彼ホを弄且く某よ預けめ甘某再三意見を加そ説諭ーいが兼伏せぞ

必ずかくても御意よ後ぶべその度ハ許さぐるぞ加二郎が願ひのまゝく彼名刀を錐

させめと言語を盡を理を我違辨めく経高を慮く怒りを鎮めゝ瀬川吉次主

従秋布若二郎を枕ホをる権く汝が預ん利害を説て後ぶべるを報

るふ及ぶこの刀の利鈍を錐せよーと期を推しく不死不死の名刀をぞ伏拝て遁

与ホけれ歌二郎が受戴よく君の大恩里巨海ゆるよく容のまゝるくかるる

恩命あらんや古ひこのうくひぞとのゝ経高領そその義が既よ任うこれが又席を

易て坐の随よ醉を盡さえ伊加太轉馬加二郎ホもをる又ホと鷹揚よ身を

起んく除々と後堂よ退くを雲時目送るを歌二郎推

さぬ哀七若二郎を捕巻ーと秋布とる枕を追立々々散動々々とゝ庭門より出てゆけば

向の瀬人の素合をる雑兵ホが渠ぶ左右のるを各々肩よ引被て倶よ蹤ゆ続ける。

第廿三回　賢寧凱旋と大團圓

陰ハ濁ゝ明ゝらぬ悟ゝ且妬むと禽獣虫魚も皆相同じ。女子めゝ嫉妬ゐゐハ七去の一去を免るゝとの古ゝゑ和漢今昔ゐゝと稀ゝそゐ中ゐ甚ゝしゐあり又甚ゝしゐかゝるゐり甚ゝしゐを妬婦とゐゐ亦その一人ゐり根塚若三郎ゞ女児糸萩是ゐ迷ひの雲ゐ身を蒸されゝる愛惜の執念利鎌ゐ入ゝ縛の索の断離ゐゝと元手ゐ把る鎌を腰ゐ挿ゝ吉次夫婦を追蒐ゞ外面投ゝ出されども聊時の後ゐゝゞ既ゐゝその往方を考ゞ心ゐゝく焦燥ゝ是首狄彼首狄と索る程ゐ必ゞ旗津の港口ゟ来ゐけりゐゐゐ二艘の平駄舟繋ゐ留ゝ水際ゐゐり當下糸萩ゐ舟人を呼ゐゝく喃その船ゐゐ向んゖゐまりゐる美男子と十八九ゐる女子のゐゐら来つるを見ゐゞと向へゞ一箇の舟人ゞ身を起ゐゝ矢伸ゝゝく来ゐるゐく問ゐ如きゐゐ男女ゐ衢ゐ快船ゐうち乗ゝ松浦のゝゝ走りゐゐとゐ糸萩遥立ゝゐそ件の人を追ゐゝとゐ来ゐるゐんいゞゐゐの足ゐりゐる船賃ゐ數ゝかゞゞ乗ゝゝく追著ゞ

かゝと憑ゐゞ舟人微笑ゝ原来ゐん身ゞ清婆狄ゝ日高ゐあらねども世渡りされゞゞ推辞んゐ疾乗ゞと応ゐゐゐ竿ゐり詰ゝく推寄ゐる船ゐ内ゞとうち乗ゐゞゞ又推出ゝ艫綱を張ゝく其処ともうゐ漾のゝゝへ漕ゞゞ幾里ゐるをゐゝぞこの夜ゞ月明ゐ海上静ゐりけれゞ船の疾ゞ大ゝゝゐねど脱ゐゝゝ人ゐゐゞ追ゐゝでゐゐ暁ゝふゐる隨ゐ糸萩ゞ心気疲ゐゝ寝るとゐゐ日睡ん敬畏覚ゞ四下ゐゐゐゐ何の程ゐ天ゞ明ゝく日影斜ゐ未の左側へ昨宵正ゝく乗ゝりゝ平駄船ゞ何地ゐ泥けん身ゞ大きゐる家の内の廊の下ゐ臥ゐりゝゞ什麼奈ゐゐ胸潰ゐゝく夢ゐ現ゐゐゐゐ疑惑へゞ居てゞゐも起ても更ゐ安ゐゐゐ心ゐゐゐ推鎮ゝゝゞ何処と問んゐも四下ゐ人の在るとゐゐゞ窓の障子ゐ推開きゝく外面遥ゐゐゐゐ分ゐ物もゐゝ登時糸萩ゐゐゐゐ身疲ゐて熟睡せゝと元平駄船ゐりゞの大船ゐ移ゝ乗せられゐる狄むゝ応神天皇の造ゝせゐひゝ枯野船ゐゞの長十餘丈ゐり又鎌倉の右大臣の唐山へ渡らんとゝ沈和卿ゐ造ゝゝゐゐゝ

大船ハそれよりはるかにへだゝりて五六十間ありけり。と浦の故老のかたり續ていへるを思ひ合すれバ。こゝも亦大船の中に作れる樓閣歟。然らずバ嶋を成る人の住る館舎にあらんぞ。そハともあれかくもあれ甚麼なる所以に彼舟人が吾儕をこゝに棄しぞや。誰そ出て来よ問まほし。と獨語つ。彼此と漫行をする程に暇の女子散動きて瀬川ねしよ秋布とのミ声幽に聞えしかバ糸萩耳を欹て原来こゝぞ所天ハ秋布とこの館にてぞ有すなるにぞあなれとて恨をのべつや已ん声をする方へ何処ぞや間毎々々のよすがるに案内ならで迷ひやせん。いそぐ是方へ来らつしと心を文べに岩越も波のある瀬なる泪涙ぞいそぐ進みける浩処に五六箇の婢妾が向の崎より捕へ来る癩人を車にのせ乗して曳つ笑ひ散動きつゝ。是方を投て来にけれバ糸萩ハやくそれと気付て身も彼にかくれよりて竊聞て後にぞ所天のぞも秋布がるをも問めと尋思し遽しく樓屛の蔭に躱れて俟程に婢妾が尾落めも車の綱をはなちてそのほとりに引居て權しと休ふ癩人ハ木魚をうち鳴らしてくちにしうさんぎようひたた　きようらたた　きようらくこゝ　らきようこゝ　らきよたこそふと唱るを衆皆笑ふぞ中に物の哀しを知るものはつくづくと見て嗟嘆に堪ず喃人々さのミいたくな笑ひそ此の癩人の腫張たる歩もかなハぬ物なれど最せし木魚を敲てかく鳴らして唱る真言の功徳ハ豫てありしかバ壽は命危くも不老不死といふ刀の銕物にせられんとて牽出されたる辱の幸ひのミならで姥口さるの憐をうけて歩行不自由なるものなれバ宿直葛篭の車に乗して此の殿造りの間毎々々を引めぐらせよかしと宣ハせしをよくも忘ずやかのもくの樂種にあなんとこの板薦のおちん限りぞ引めぐらねバやとりにて衆皆笑ひを止て寔に然りと応へて諸手を掛て引く綱の座席車の裏きに木魚の音をうち添て奥深く引もて侶に後れし一箇の婢の走るをやゝと呼留る糸萩ハ樓屛の蔭よりしづかに立出て揉手をしつゝ腰を折めて喃女中がたの侶侍らん瀬川浦三郎といふ弱人が一箇の女子を伴ひてこの御館にこそ来るべからめ妾ハ由縁の

この婦幸も凡女ならむ亦是得時ず分身るうん作者明ら地ことを説出さば蕪餘情あらもんとそ看官下の物さうの段ふ手りそよろしくお見を猜もべ

遭ふ立かへりて且堅ふ見ん横ふ入ら後巡りて頭をうち揺り否浦二郎といふ人いそ妻ある狄情人ふ狄秋布と呼ばさるいと美ら兒女子と共ふ二の御館ふをそのー初ふ君姪高公の悩まふ悖ひとくいて折檻せられーなども縁ふ降参もてけまで彼秋布をぬりて身退近く召置ると人の噂ふ忽ふなるのを俺ども御家老さふ願ひおうとてあんとも思うんとも捨て又もんとまるを糸萩ふ遠く狄ふ携り引留てその吉次と名告まるふ浦二郎ぬで侍るかよや銭問を隔る後堂ふ置るともさうもう願ふ窃ふ汲引て遭ひ情ぞやよ嘯々と泣声立て口説を聴ず振放て三六無礼過る女子ふ浦二郎でも士口次でも銭人妻のある兒ぞおりふ彼人と情由ありて追蒐来る淫婦かそあらんぞうめ不義淫奔ふ武家の大禁罪得ぐおりて汲引をせんや癩人車を曳後まで明聿違ふ叱られん不覚るり兒と呟きて遣ふと引留まで妨げまると揮拂ふ巻の呀ふ糸萩ふ卻合を撃まで踏地々々と俊僧て揆と轉輾べうとても腰ふ挿さる鎌の刀尖深く中脘をざうりぜんと擲所さうり叫苦とぞり魂消る声ふ驚きふんかる婢妾ども騒ぐ胸を推拍て隊て准備をさうけん秩の中より細小さる一箇の壷を取出て糸萩ふ痛口ふ注ぐ鮮血を受入々々造化精妙と戴きそ走りて奥へ赴きけるを耳てて糸萩ふ起直まても立まで兒必死の深疵ふ怒れる声を戦ーて噫腹立ー朽をや憎ーとおりふ秋布ふいふで怨を復さんとて帯ふ挿さる鎌ふ身を辟刃まーふ前ふ世ふ造りー罪の報ふる狄紙ふるも恨ー兒ふ浦二ぬー名を誇りて嫂と夫婦ふるうん為ふのみ聞うぬ身を暗くて天の免さぬ逆賊ふ従ひあふ何事ぞ忠孝信義の道絶ーふ人ふりふともの甲斐文ぞる兒怨ふ今ぎり九ッの世を見るとも盡べーやるこそもかくも現身の息の内ふ本意遂て兒魂魄かの身ふ貫縁て死天の山路ふ伴ん

その折ふし知るもか南無阿弥陀佛と唱へつゝ身ふるひ利鎌を引抜きつゝ吮を掻んとする程ゆやよ等未通女惣のもせそと声高呼ふ呼禁つ杉戸ひきつゝ糸萩が身退へ進ゝ寄るのあり是則別人ならず姥口歌二郎得時歌二郎ハたくくと笑ふ喚ふ堪ず再声を激てやをれ糸萩苦痛を忍びくるぶいふようを仔細ふ聴けられ瀬川胞兄弟ふ大ゝさるゝね舊縁ある姥口歌二郎得時と呼るのぞるゝふ不測の術ありて人の吉凶禍福ハさゝえ過去未来の事まてもこれを知ぞとのうるゝ倩汝が前身を考るふむう欽明天皇のおん時ふ紀男麻呂ふを将とつゝ新羅を討ゝおのゝふその軍利あらぞて虜ふせられ日本の義烈士調吉ゝ伊企儺とふのあり伊企儺ハ敵を罵りそこゝを胡子和とのゝ新羅国の大将ふ殺さるゝ是よりその後六百三十九年を歴て伊企儺ハ肥前の松浦なる瀬川健三道孝が二男浦二郎選如と生るゝ又伊企儺を殺ゝる胡子和ハ則汝が身ふおをて浦二郎と妹使の縁を結べども竟ふ夫婦とならず

伊企儺ハ欽明天皇即位三十二年ふ殺害せられ浦二郎ハ亀山天皇の文応元年ふ生るゝれハ此星霜六百三十九年ゝ

その兄瀬川吉次を浦二郎と名人違ゝその惑ひ深くゝ二親の諭ゝを信けず吉次夫婦を追蒐来てその身を殺ゝるの是前世の業報ゝられハ必ゝも怨むべらずされバ又浦二郎ハ最ふその兄吉次が名を冒ゝ形を似せて鎌倉へ赴く海上ゝれ同船ゝて血氣を蔵めその厄を禳せん為ふ高王観世音并ふの呪文を傳授ゝつゝかが相模ゝる動の磯ふ長門国大津郡向の埼ふ着きゝ時浦人の父祖の忌日ふ数日の潮毒ふく高貝盲ふ入つゝかが身ハ腫張て行歩ふ堪ず三稔を送りゝゝ厄中ふあれバふく今茲ハ彼脆兄弟の災阨将ふ釋んとすれバこゝを知るふふこの処へ鬻ふ汝ふ乞ゝ座帯車ふ乗せられく木魚を鳴つゝ呪文を唱へゝ瀬人ハ即浦二郎ゝ渠へ神呪の利益ふより死ざることを得ざれども彼潮毒を治せんふ草根木皮の力ふ及ぶ只戊己の年月日時ふ生ゝ女子の土徳脾の臓の鮮血を採く

後
脾血潮毒を解して初て前身を知る
秋二郎

前
乞者を弄て諸婢車を引く
浦二郎
若二郎

一時に三ツ飲とれハ舊毒立地に除祛てその腫氣水の決する如く卒然として消散せ世に潮毒を解するもの土なるゝ故その效なし且汝が八字生来の戊己なるのゝなるゝ支干ハ未と午に在て亦是五黄土徳に属せる汝が命運ものに竭て劍難脱れかたかるよしをこれ豫てより知るをもて又幻術を施して この船中へ引寄てりさまゝ利鎌を働して索を断しもこゝ術ハ獨汝が執念のよくする所にあらざりし憶ふに汝が前身ハ新羅の胡子和なるにより この土にてハ糸萩と名つけられしも名詮自性萩を芳宜と訓するハ皇國人の誤にて和名を芳宜と呼做せものハ漢名即胡枝花なり（胡枝花ハ本草別録に見えたり）胡枝花と胡子和とその音近し亦一奇事といふまゝのゝ然れバ過世の業報にて調の伊企儺が後身なる浦二郎と縁を結びし恩愛仇となるまでに三稔の間胸を焦して遂に非命に死するといへどもその脾の臓の鮮血もて良人が三稔の難病の良薬となる大功あれバ成道成佛疑ひなしとゝろゐる狄と説諭せ言語の中に糸萩ハ迷ひの雲霧霽ゝ天津日光をゝるゝごとく悔しくも恥しき身の業報を今ぞ知る感涙なる方なりける志を励して

戰袍ハ前集に直垂に作とり即鎧直垂を後世とれを陣羽織といふその製なるゝ後集ハ俗稱に從ふのゝ

歌二郎を伏拜ゝ又ふしおがゝ伝と向上て女子の愚痴に胸陝くて思ひ違へり認たがへて恨まゞ人をしも恨ゝしハ現罪深けれ然るを神にも佛にも劣ゝ身の教訓有ゝきまゝ忝く名僧智識の引導に優せ心地して稟侍りよりや過世ハ仇なりとも此の世に在ては妹と伎の縁を結びし浦二郎ハ切て今般の對面をといひかけて又泣沈めバ歌二郎も目を屡動きて適微妙き覚期ゝ誘さらバ願ひのまゝに選如に對面させん瀬川同胞其処にや在るとて進ゝねと呼立れバ杉戸の蔭よりて応しくてや立出る浦二郎ハ癩人の相貌引かえて衣裳美々し大小の刀を腰に跨へて手に一領の戰袍と一箇の木魚を携ゝる蹤に續くハ吉次秋布蓑七も出て来ゝ身員の身邊に囲繞して歎き勤るそが中に浦二郎ハ愀然と糸萩にうち對ひて絶て久し吾妹子が臨終に對面してものいひ替せハ鮮血の功驗併姥口ぬしのまゝ情に依るものゝ曩にこゝ身を加二郎ホに撃れて浅痍を負ひし時海水に漂没して両刀を失ふものから幸ひにて執權家よりこゝ兄に賜ひし

この戦祀の身をなさずつら面影の変りゆけば親子兄弟うとうとしき世ゆ認めあるべうず再會の日の幾ゆせんと必ず秘置うしかどこれ嫂御を認らずばいなる日向の墳ゆ来て訪ふとも何ぞ得うこれとあん身ゆ過世の怨敵輪廻ゆ環の端なれ如く倶ゆ肥の刻ゆ生まれ来て夫婦の情義を果さるどころず難病の本復ゆ全くなん身の績ろり業因消滅をさらんゆ来世永々夫婦とろうん鬱ゆなりの刃の厄難解除の為ゆ唱へ一真言も木魚も今ゆ妻の為長く菩提を吊ん佛果を得よと勧むる世ゆ頼ん処良人の言の葉餘波の花の糸萩ゆ苦痛を忍びうち向上て如此宣へばろうくよ死して栄ゆるうず身の幸ひゆ未ろぐ百年の壽命終らせゆ日を草の原ゆく俟侍らん来女さる御夫婦ゆ面目ろく今ゆうゆひとよう欲ゆ父う母御前孝行らく仕へせぐ歎きを遺せ不孝の罪許さゆとか紀口説を佐くゆ得堪ぬ手枕生声を何とろうぐ浮世ぞや悲ゆろと推拐着く歎きを枕る若二郎も苦ゆ胸を推拐く手枕さのこ歎きろせそ過世ゆやぐ現世ゆて子を先ろる薄命ゆうろう時情欲の罪障ゆそゆうんぞろ嫉妬の歔滅ぜーそ想思病ーそ空くうぐ心のこうゆ後世ろるとう今ゆ迷ゆの雲霄ゆ十臨終ゆひと愛さゆ十念勧めんかーとの声定ゆ佐くや親をうんかる糸萩ゆ糸うゆ細る声立く爺々ゆ母御前ゆうろうゆを念とーぬかー憑みをく ろ二親を浦二郎ゆ一憐ーぬひろぐ妾ゆ為の追薦供銀ゆ元ゆ優をあるべーやゆ頼ゆ侍るこのうのことのう言毎ゆ息絶ゆうる手枕ゆ倶ゆ死んと泣沈むを歌二郎諫将ーそ益ろ悲歎ゆ時を利さぐ蒙くの計畧空をも

母ぞゆーなく々公もゆゆをなるぞ一言えとろる今了生の告別をまゆぐや過世のさまをかくも ゆまゆ樫の實の只ひとう子を養育ーゆまろ六とせゆうよ夢と覚くとう遺されー柞樹の何とろうぐ浮世ぞや悲ーろると推拐着く歎くを枕る若二郎も苦ゆ胸を推拐く手枕さのこ歎きろせそ過世ゆやぐ現世ゆて子を先ろる薄命ゆうろう時情欲の罪障ゆそゆうんぞろ嫉妬の歔滅ぜーそ想思病ーそ空くうぐ心のこうゆ後世ろるとう今ゆ迷ゆの雲霄ゆ十臨終ゆひと愛さゆ十念勧めんかーとの声定ゆ佐くや親をうんかる糸萩ゆ糸うゆ細る声立く爺々ゆ母御前ゆうろうゆを念とーぬかー憑みをく ろ二親を浦二郎ゆ一憐ーぬひろぐ妾ゆ為の追薦供銀ゆ元ゆ優をあるべーやゆ頼ゆ侍るこのうのことのう言毎ゆ息絶ゆうる手枕ゆ倶ゆ死んと泣沈むを歌二郎諫将ーそ益ろ悲歎ゆ時を利さぐ蒙くの計畧空をも

今ゝ根塚夫婦亡骸を快船にうち乗せ伊万里へ帰りそく葬ふ夜秋布の刀自も今
さうみ泣さをる処ゆゑもぎ親の仇なる加二郎を討捕る准備肝要ぞんその後見の関蓑七
瀬川氏同胞もかの期の手配ありこゝ齊二勇ミゐる夫婦兄弟主従のそが中ゆ
若二郎ハ悶然とそく立ちあがりこゝ処ゆ留ふ二の処ゆ留ふ
けり登時浦二郎ハ腰ゆ帯ゐる両刀と戦袍を共にそく兄吉次ゆ返しそく
物ゐりを某借用しそ錦倉走りく折両刀を海底ゑ遺せよ不老不死の中刀ハ加二郎ゆ
罹ゑ大刀ハ又姥口ゆの何の程ゆうかゞ揚そけゆ某ゆ賜ひゆ死先ゑやこれを受ふ夜と
いふゆ吉次欸ひくこの両刀ハ親の像見戦袍ハ君の賜ゐるを失ぜりそく返さそ是も亦
姥口主の庇ゆくわりける欸三稔以来ゴゞ腰ゆ帯ゐる和殿の両刀とそりやべりそく遣与ゆ受つ
兄弟夫婦仇討の准備ゆ暇ゑそけり然程ゆ鼠川加二郎ハ吉次降参ぎるゆゑり走馬場の
葩の中ゆくく不老不死の名刀を錐りそく御覧ゆ備へとのゆ下和を歌二郎の傳へーかゞ歎ふこと

大ゝさうずゑ時刻ゆもうりーかゞ組紐の袴を被ゐ袴を裙高ゆ結ゐ苛物造りの両
刀を腰ゆ帯そひとり走馬場ゆ立出ゐり且くそく経高ゆ彼名刀の鈍利をゑん為ゆ檜垣轉
馬浮簀伊加太郎ホを従へそ慢幕打ゐる観駿舎の階ゆ暇ゑそけり然程ゆ鼠川加二郎得
時ハ百五六十箇の雑兵ゆ馬場の四方をうち囲んでその身ゆ床几ゆ尻を掛ゐ観駿舎の埒の
中央ゆゐり既ゆそ加二郎ゆ歌二郎ゆ身邊ゆ来ゐ彼名刀をエ乞求ゑゴゞ歌二郎微笑で件の
不老不死九ハ和殿ゴ吉次を斬ると宛ゆ某これを遣与せべー權く等ねと推禁ゆ東のくゆ
うち對ひそく秋布主従瀬川兄弟そくく出よと呼ばれゴ風も漏さず立囲ゐる雑兵ホゴ
背の方ゆ忽地阿と応ゐ秋布ゴ白き夾衣ゑ玉砕しそく進ゐ来れハ瀬川采女吉次ゴ弟瀬川浦
二郎選加と列立ゐ錦の戦袍を被下ゐる肌膚ゆ細鎖の帷子を著そゐ甲冑肩ゆ身を固め各々両刀を腰ゆ帯そく絶の中ゆぞ
入ゆける登時秋布主従ハ加二郎ゴ左右より進ゐ近つゐ化と疾視そく不倶戴天の父の讐

鼠川加二郎覚めら汝が謀書の故をもつて寃杜が命を隕せ博ヨヌ弥四郎素延が女児秋布従僕関蔓七と名告らばともよく考りつらん覚期をせよと詰よすれば加二郎大く駭きて

吾君が降参らば仇討の事を願へりされば知らぬ吉次夫婦主従がが非物がせるべき景が事ぞと向せもの歌二郎が阿々と冷笑ひて愚ろるる加二郎武行瀬川吉次が既ゆゑや

撃捕さ鎌倉へ立帰りその身の罪を贖んと豫て仮倒に浅智の宵中に憑むともやは斐覚うるさく勝負を決せよとのまさく加二郎脱る路なく怒る声をふり立てて原来こが計較の裏をそもかもとめけりその誤を武行が本事を必ず知らべし観念せよと

喚呼が匂匂と刀を抜き撃んとするを秋布が薙刀もて戦ふ蔓七も又秋布を資けて挑む刃の電火丁々破と撃あふる後の方が浦二郎が身方を勇る声高ゆが動の磯の遺恨を譲ぬべし透を

寵ゆく薙刀左よ右よと烈く死助言が加二郎いよく焦燥く背が立る浦二郎を斬んとするが敵の透間を秋布得さらと薙刀を振冂く丁と砍る刃の光が加二郎が

蹉谷三寸深痍を負く怯むを透さず蔓七も一六刀當る主の仇力を勠て斬伏せり

當下秋布が腰が挿る命婦丸の短刀を引抜く十々滅を刺く立あがれば歌二郎が扇を

披きてその死立の稱賛をしかれをうる雑兵ホもこれ声を合て誉めけり既ゆく経高の瀬川同胞秋布ホを観験舎へ召登て主従一味合体の盃を取せんとて欣然とく俟程が歌二郎が相伴る吉次がや浦二郎と共侶が登り来つ主の身邊が彷りる伊加太轉馬を蹴倒せば両人齊一散駈怒ゆく身を起しん腰刀を抜んとするを抜くも果ず晃めつる脆兄弟が鋭利き刃が伊加太郎轉馬も首を撃落されく左右よ撲地と仆ふりぬるを見ゆる敬為体が経高頻ゆる散駈騒ぎそ寄れや者共この癖者をさく斃み留よと呼さく逃んとするが外面より秋布蔓七が衆ふて先路を

すゆく塞ぎる後の方より士次疑如倶ゆ勇る声高やゆ逆賊経高逃るとそ何処へ脱
走ぶ○ゆ汝ら時宗朝臣の御談ゆ従ひ奉ゆ久く索ー甲斐ありて姥口氏の内裏を
窺うようて目今誅まるぞ刃を受けと名告りかけく胞兄弟ひとく撃ま大刀風ゆ経高ゆ往るゆう
深るゆ撻と倒ふ士を起直ゆく声を苛立つぶ忠臣とぶひう歌二郎ふ心変りてつらく赦
免非道の挙動噫朽をつと敦圀ゆ歌二郎進ゆ出向々とうち笑ひく経高ゆくもぎ暁
と得らぎゆうぶ今福ゆく自滅を救ゆく二稔汝を艱ひゆ謀反ゆ与まる所以ゆありぎつれ
と累世因ゆある瀬川氏胞兄弟の尼釋故郷へ帰る時汝を撃ー大功を立ぎれとぶ定
然ぶこの乾坤尤の連環船も樓閣亭舎も美女雑兵もつぶ妙術の致を所皆是海市
蜃気楼の類ぶると知ーざるや雖然二稔来よ死夢をのこりぎるゆ諺ーく汝が為の軍師
清縄が受ーる俸禄の恩ゆ答るつぶ聊の心操を凝ーくゆ彼をつよとのひつ秘文を
唱ふぶ今やく四下と捕囲ーる百五六十箇の雑兵ら忽然とうく小蛇ゆ変ーく斉一海ゆ
飛入く往方もちらぎりゆ経高駭怪ーく忙然る後の方ゆも立遠る吉次ぶ声
久く内ら刃の呀ゆ経高ゆ頭を撃ゆれく仆ふり浩処ゆ若二郎ゆ手枕と共倶ゆ物の蔭
より出ぎ来つ人々みち對ひく姥口ゆの懇切ゆ糸萩ぶ亡戦を成ぎて帰ふとのふ
仇討の縁の趣を見んとく彼処ゆひた獨加二郎のこりて経高ぎゆ誅伏せ一ぎ是ゆ留家の
洪福ぶこれゆ就ーも糸萩ぶこのひく眼七を慶動けぶ歌二郎慰めーその愁嘆ゆさるるぶつ本
是因縁ありてこれ悦ぶ心一も悔べらぎ郷ゆ説ぶ如く浦二郎ぶ前身ぶ調吉士伊企儺之
伊企儺ぶ妻大葉子も節を守り歌を詠ぶく新羅の軍兵ゆ殺されうそぶ後身ぶ鎌倉
ぶる博多ぶ倍太郎正延ぶ女児千鳥これこの少女ぶ浦二郎の妻ゆるべ六のゆれぶそを糸萩ぶと
ゆゆ做く親ゆぶ久後安うるべ只吉次の前身の大伴披るぶ又秋布の前身の松浦佐用
嫒ぶるのぶらんや浦二郎千鳥ぶも亦ゆる因果ありぶ努々疑べらぎとらゆ哀嘗感佩ーく
終ゆも姥口ゆ鬼神を欺く智術ゆりぶ且来女浦二郎ゆ舊縁ありと宣ひゆるる故ゆひ

せ川吉次
せ川清十
くん馬
伊加太

仇を撃逆を
棄げく忠孝
両全も
加二郎
その七

○ひとくと○うそつ○いま これ つ
そと齊一向ふ領きそ今ハ誰ゐ聽む兒ろれ○
のぶゐら ぐこせた○ぐこぐら と
選如ホが外戚ろる岬氏ハヨゴ子ろり一龍村の後裔ろれが捨かそ紛ひありまのそ三稔来
ぶ こちそちそ ○ 容ぶあり○と
影ふ立形ふ添ふそ○その尼難を防戍そ繆の三ふ及べる同胞功成り名を遂ぐ三べ兒ようそ
あんう ○ひべ いそ ふそう ○ ○ の
相別まん東の磯ゐ二艘の船ありその二艘ゆハ瀬川胞兄弟。秋布蓑七ホうち乗そそ安く鎌倉へ
なむ ○ねつふうそ ○ の ○いまり へ ○ これ
赴くべ又二艘まの根塚夫婦糸萩が亡骸をうち乗そ伊万里へ帰りて埋葬せよ今ハも是定
きえう ○ひぜのふ つむめし ○ ○ ○ ○
滅失せく肥前州ふありとの無人嶋ゆぞうふ出る外面ふ降集る雲ふうち乗そそや空中ふ登ると又そ
うこち こちちそそれ○あうふ ○ うど さ とび
形體ふ忽地金色の神龍と顕まそ長門の方へ飛去る程ふ乾坤尤の大船殿舎も煙の如く
ふそ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
嘆せごとのみのそく倶ふ其方を伏拝こそ○ふ久後を祈りうかそ吉次秋布浦二郎蓑七
ら○つうこうそ ○ みつ ○ねぼ ○ ○ ○ くび
ホハ経高主従の三箇の首級と鵜川加二郎が首級を携そ若二郎手枕と共倍ふ龍神の諭ふ
ふそ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
従そ東の磯ふ到そるふ果そ船二艘ありそ○二艘ゆ糸萩の亡骸さ乗そそ○かべ

裂皆ひそく龍神の冥助を仰ぎ尊こそく送ゆ再會を約一袂を分ちそ各々船ゐ乗
ふそ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
けるふその両船ハおのづそ東西ゐ別まそ走ると飛鳥ろも速ふれバ若二郎夫婦の乗ろ
ふそ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
船ハ瞬間ゐ旗津ゐ著きぬ又吉次ホが乗ろ船ハ数百里の海上を只一晝夜ゐ走る程ゐ次の
ひひひ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
日未の比及ふ鎌倉ゐ著一かが吉次へ浦二郎秋布を相伴そ執權の御邸ゐ赴き経高加二郎
ら ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
ホを撃捕ろ事云云と訴け一登時北條時宗朝臣ハ吉次が恙ろ帰参一を訝り ろ
ぬち ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
石近ひそその瘁の趣を問べバ吉次ハその身夫婦の事の顛末并ゐ弟浦二郎ぞの俊平が
○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
枉死蓑七ぞろ。又若二郎夫婦糸萩がろまでの向の塚ろ龍神の擁護ゐよそ本意を
○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
遂ろ一五十を述訖そ秋布ゐありろ仇討免許の御教書を返上一けバ時宗感心大
○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
かころぞ浦二郎秋布蓑七ホゐ。共倍ゐ見参そ一やそ褒美の辞をのり賜そ首級実
○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
検ありそ経高主従加二郎ホを真衆首せゐ介石吉次ゆ舊領の外ゐ采地五千貫を
○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
のりそ頼綱の次職ゐろそ浦二郎ゐ。荘園ヨヌ宛行ひゐひそ木の龍華へかへ遣一

且隔年ハ鎌倉へ参勤せよと命せらるゝ。ばかりにまた博ヲ倍太郎ハ龍神示現の趣を傳聞く
疑ひとらくその玄児千鳥をのそ浦二郎ハ妻へハ且根塚若二郎手枕を親の如く又男姑の
ゐ親ゐうせよと教訓そ俱ハ肥前へ遣しけり。
示されしめでたし。
ハ秋宜ハゆり秋布ハ石切山ゟ叢菊の中ゟ生れうといふ菊子と呼べるゟんを
當時諺ゟありけるゟ菊の異名を取さうと作れ然ゝばけふゟ改めく菊子とつけまし
とく件の名をそのつける有此而秋布の菊子ハその次の年より六七年の程ハ男児四人産ハ
けれバ吉次その二男をとゝ外祖博ヲ弥四郎が家を嗣しめ三男を荏七ハ養しそ関氏を旨し四
男ハ俊平ゟ後ゟく村山氏を旨しけり。又浦二郎ハ浦二郎もその妻千鳥ヲ子どもヲく産しそ両家東
西ハ繁昌おけるされバ又根塚若二郎手枕ハ

○傳ハ曰近世の歌儛伎役者瀬川菊之丞ハ吉次菊子が情義を景慕しそ瀬川
と稱し菊之丞と名ハ於ゐうハの世の人の知る所ゝ按るハ元祖瀬川菊之丞ハ享保
十五年の冬初ヲ東行ヲ中村勘三郎座へ出ゐうハ京都榊山
四郎太郎座ハありしハ二の菊之丞が俳名を路考とのひしハ吉次が父の名を道考と
いるゟく暗合おとのべ又二代目瀬川菊之丞ハ吉次菊子が情義を景慕しそ瀬川
のれも亦采女吉次が名を取まるゟや強そ説をとゝ又三代目瀬川菊之丞ハ菊次郎が俳名を仙女とのひしハ
浦二郎が實名の選如と字音相近しとれらハ蛇足の辨ゐうを綽の因ハ識せのそ
曲亭主人自評しそ曰第廿二回吉次呵責の段ゐる音曲合奏の趣ハ頗雑劇の
脚色ハ似ゐうありとゐれども乾坤丸の為体ハさぞく神龍化幻の術中ハありしハ譬べ妖狐の
人を魅ゐまハ異ゐうぞハ為とゐ事とそめゐうざるとゐるべし。

路考が屋号を濱村屋と唱るも吉次ハお母が濱村氏と前集ハえれへ縁ありし

大約小說ハ實場あり虛場あり虛場ハ所云乾坤乙舩舶中の緯の趣又村山俊平が夢寐の一段即ち是實をうつし情態を写をハ虛の猶假の如し虛實の二場を辨ずるのをよく小說を觀るとのみ曲亭主人又曰ク予が著ス所の既ハ二三十年ハ及べるのあらその則板若干亡失ス全カラざるの故ハ久しく揭出さでるのみある古板をあさり求めよく足らざるを補則ち予ハ校訂を詰ぜしそ恣ハ画を易文を誤脫しそ再刷するのみあり所云拈頭巾縮緬紙衣化競丑二鐘亡の他ハ乙ハあらべし凡そ是らの書ハ予が名歸あるとハいふとも予が校訂を歷ぜしそ他人の手ハ成るのかまべ予が全作とせべらず漫戲の舊著を物がきくハんを大人氣ハ似ざるど名を賣るの晦澁さハ言のまハ及べるのみ看官これを察しねり

松浦佐用媛石魂録後集卷之七終

家傳神女湯 ○くちのまち 諸病の妙薬一包代百銅
近年某侯高遠より○○○薬種をえらび功のみをつくりむめさ剤のみのみ
精製妙奇應丸 大包代銀米中包代五十 小つゝみ代五十
薬種をえらびせいをつくしてねりあげ○○○○○
熊胆黒丸子 ○○○○○○○○○○
婦人○宜妙薬 一包六十四銅 半包三十二銅
製薬 神田明神下同朋町東横丁滝沢氏
弘所 元鮫河町中坂下南側大○○○○
同東○所 横山丁三丁目賣薬店 大○○半藏

近世説美少年録 曲亭主人著

出像 浄書 剞劂

曲亭翁新著松浦佐用媛石魂録後集画工筆畊剞劂目次

溪齋英泉画

谷金川 筑波仙橘 原喜智

巻ノ一四五六七ノ前段
巻ノ二三七禾并二序目

初集五巻来己丑の春正月相違なく製本賣出シ申候
此節ヨリ追々後集と同時ニ製本仕候御求被下候様願上候

文政十一年戊子春正月吉日發行

大坂心齋橋筋博労町 河内屋茂兵衛
江戸小傳馬町三町目 丁子屋平兵衛
同 横山町二町目 大坂屋半藏梓